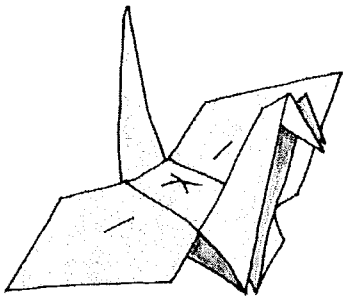


第１部

戦後 60 周年記念
平和祈念文集

平和祈念文集の趣旨

戦争を知らない世代が市民の約7割を占め、そろそろ、おじいさん・おばあさんがその世代になってきています。次の世代に、過去の戦争の悲惨さや恐ろしさを、きちんと伝えていける最後の機会ではないでしょうか。

そこで、戦中・戦後の貴重な体験を活字にして残したいとの考えから、原稿を募集し文集として発行するものです。もちろん、世代を問わず、平和について思っていることや考えていることの原稿も募集しました。また、将来の平和な社会を担う子ども達を対象に、戦争や平和についての感想文や作文を募集しました。

この結果、戦中・戦後の体験、平和についての思いなど、一般の方 35 人から、子どもたち 36 人から、それぞれご寄稿いただきました。また、聞き取り寄稿のお手伝いとして、12 人の聞き取りボランティアの皆さんにもご協力いただき、その感想もお書きいただきました。

平和祈念文集の構成

はじめに、一般の方の寄稿文（氏名 50 音順）、次に聞き取りによる寄稿文（氏名 50 音順）と聞き取りボランティアの感想文（聞き取りを担当した方の直後）、次に小学生・中学生・高校生の寄稿文（学校単位）としています。

用語の解説など

戦中・戦後には、今あまり使われていない用語が多く使われていました。例えば「兵站」という言葉があります。

このような用語は、「兵站（へいたん）」のように表記しました。難読文字の読みは、用語の直後に（　）で示しました。また、文字の上に▼を付した用語は、付録として用語集（P310 から）で解説しています。ご活用ください。

小学生だった私の戦中戦後の経験

安西　貞子（湖北台在住）

日本の国の第２次世界大戦終戦の１年前のことです。当時、私は神奈川県横須賀市に住んでいました。度々、敵機アメリカの飛行機（その頃はそう呼びました）が上空を通過していました。それは首都東京を偵察するための通り道だったようです。しかし日本にとっては大変危険なことでしたから、横須賀に駐屯していた陸軍や海軍が高射砲でそれを打ちました。当たることもあり、当たらないこともありましたが、どちらにしてもそれが落ちてくる危険がありましたから、子供たちは安全な所へ疎開をすることになりました。私たちの学校では４年生から６年生までが疎開をしました。田舎に親戚等のある人は自分で行き、無い人は皆と一緒に決められた所へ行きました。初めて両親から離れて知らない所へ行くのは大変心配でした。出発の時、私たちが電車に乗り、親たちはホームで見送りました。「元気でね」そしていろいろな注意を受けて、電車が出発すると皆が泣きました。汽車から下ろされた所は茅ヶ崎でした。駅から沢山歩き、ようやく着いたところは田舎のお寺でした。出身地の地域別に、いくつかのお寺に別れて生活をすることになりました。私は、中でも一番大きなお寺で 50 人程が一緒に生活しました。お寺の本堂の横の部屋が私たちの寝るところでしたから、夜になると恐くて眠れませんでしたし、東海道線の近くでしたので汽笛が聞こえると帰りたいといって泣いてしまう子もいました。食事はお寺の前の小さな食堂で半数ずつ食べました。大豆やさつまいもが沢山入ったご飯でしたが、町の人たちから野菜を戴いていましたから、ひもじい思いをしたことはありませんでした。でも、間食がありませんから男の子は、時々倉庫のさつまいもを盗んでかじり、先生に叱られていました。そのように未だ小学生ですのに長い月日を親から離れて不自由を我慢しなければなりませんでした。これが集団疎開の実情です。

その上、学校で勉強をしている時に、急に警戒警報のサイレンが鳴り、急いでお寺に帰らなければならない時に、皆で一緒に川の土手や田んぼのあぜ道を走りました。その時、敵機が頭上を通過したことがありましたし、一度は急降下してきて機銃掃射を受けました。その時はいつも練習をしていた通り耳を指で押さえて地面にひれ伏しました。このようなとても恐い思いをしたこともありました。でも、子供達はだれも傷つきませんでしたからほっとしました。（これは、近くに軍需工場があったので敵機はそこを狙ったのでしょう）

終戦の１ケ月前の夜のことでした。夜中に「早く出てこい」と先生の大きな声が聞こえ、起き上がると、あたりは昼のように明るく照らされていました。（照明弾を落とされ、近くの工場が攻撃されたのでしょう）皆は寝巻きのまま裸足で走って、庭にあった防空豪の中に入りました。しばらくして「外へ出てこい」といわれましたので外へ出てみると周りが火に囲まれていました。私たちは先生の行く方へ付いて行きました。畑の中を通りぬけ、村の小さなお宮の森まで必死に走りました。森の中で朝が来るまで体を寄せ合って過ごしました。その時、車が道路を走るような音を何度も聞きました。あれは飛行機の大軍が通る音だと聞かされました。また、すぐ近くで爆弾が破裂する音が度々聞こえました。私たちはいつ死ぬかと思いふるえていました。しばらくしてやっと静かになり、夜が明け始めた頃、先生について隣の町にある同じ学校の友達のいるお寺に行きました。井戸端で足を洗い、そこの友達の布団に寝かせてもらいました。小さいお寺に大勢行ったのでぎゅうぎゅうでしたが、疲れていたのでぐっすり眠りました。目が覚めてから、外へ出てみると、焼夷弾の破片が沢山畑に落ちていました。先生が私たちの居たお寺に見に行ったところ、男子の防空壕に直撃弾が落ちていたそうです。そして、お寺と食堂と町長さんの家だけが焼けてしまいました。敵は空から見ていただけなのに、よく的中したものだとおどろきました。翌日、子供の家庭に連絡が行き、多くの父親が勤めていた造船所のトラックに乗って、家にあった服をもって来てくれました。それはとても嬉しいことでした。でも父は直ぐ帰ってしまいました。しばらくして、焼け出された子供だけが４日間のみ家に返されました。逃げた時に裸足でしたから、お世話になっていた学校の上級生が編んでくださった「わらじ」を履き、電車に乗って帰りました。でも、まだ戦争は終わっていませんでしたので、４日たってからまた疎開先へ戻されました。その時の辛かったことを忘れることが出来ません。私たちのお寺は焼けてしまいましたから他の小さいお寺に分散させられてしばらくの間そこでお世話になりました。

ある日、お昼ご飯を食べている時、大人が神妙な顔で、隣の部屋（和尚さんの部屋）から聞こえてくるラジオの音声を聞いていました。今思えば、あれが終戦を告げる天皇陛下のお言葉だったのかと思います。それから２，３ケ月して、私たちは自分たちの両親のもとへ返されました。これでやっと安心しました。

しかし家には食べる物が無く、店にも売っていませんし、配給される食べ物は少なく、そこで５年生だった私も父と一緒に農家へさつまいもを分けてもらいに行きました。それ

もお金ではなく着物等と取り換えなければなりませんでした。私は 10 キロ程のさつまいもを背負わされて、ぎゅうぎゅうに混んだ電車に乗せられて帰ったことを覚えています。また、食べ物の足しにするために山へ木の芽を取りに行ったり、海へ貝を取りに行ったり、塩が無いので海水を汲んできて木の枝を燃やして蒸発させ塩を作ったこともありました。沢山海水を汲んできても少ししか塩は出来ませんでした。人間は塩がなければ生きていけないということが身にしみて解りました。これが戦争の後の苦しい経験でした。

町へ買い物に行くと、街角に片足や片腕の無い負傷兵がお金をもらっている姿をよく見ました。ほんとうにあわれで、気の毒に思いました。

戦争は本当につらいことばかりです。戦場に行かない人でも、苦しい悲しいことを沢山経験しなければなりません。これからは決して戦争をしてはいけないと思っています。

戦中の思い出

五十嵐　淑郎（都在住）

私が初めて空襲を体験したのは忘れもしない昭和 17 年 4 月 18 日である。当時東京府立大泉師範学校（翌年官立東京第三師範学校。現東京学芸大学）の 1 年生になったばかりのことである。ジェームズ・H・ドウリットル中佐を総指揮官とする双発の陸軍中型爆撃機ノースアメリカン B25 の編隊 16 機が東京を初空襲したのはこの日の正午頃である。確か空襲警報のサイレンがけたたましく鳴り校庭に出たのは 12 時半頃だったと思う。黒っぽい日本の飛行機と違う機体が 1 つずんぐりむっくりとした胴体を真上に見せ、たちまち見えなくなってしまった。高射砲の弾幕と発射音が聞こえた。確か尾久町あたりで最初の犠牲者 6 名が出たと後で知った記憶がある。なお、私は、真珠湾攻撃で勝利を得て勝利の気分を持って僅か 132 日目の事ゆえ、別に恐怖心もなく戦争の現実感と言うものを持っていなかったように今では思っている。又、この場所は現在の西武池袋線大泉学園近くの東京学芸大学付属小学校のある所である。

なお、この年、即ち、昭和 17 年 8 月 23 日、24 日、25 日は橿原神宮外苑野外公堂で全国男子中等学校師範学校全国男子国民学校教員體育（たいいく）大会が行われた年である。私は大泉師範学校相撲部員として参加し、選士の激励に見えた東條英機陸軍大将を目の当たりにし感動したのを覚えている。かくして私は昭和 19 年 6 月に徴兵検査を受け甲種合格となり大学高専の繰上げ卒業の制度により 19 年 9 月 18 日東京第三師範学校を卒業した

のである。その年10月1日国民学校訓導として東京都足立区寺地国民学校に奉職した。食糧難の折、4年生を受け持ち、コッペパンの配給を生徒に分けたものである。

そして、11月末頃よりB29が1機ずつ飛行機雲の尾を引いて晩秋の空に爆音を轟かせ帝都の偵察に毎日の日課の如く来襲し始めた。又、昭和19年11月下旬には風波立騒ぐ手賀沼で研究授業の教員11名だったか舟の浸水で溺死したのを同じ教壇に立場を置いたものとして痛恨の極みと受けとったのを覚えている。その1人の女教師は私と小学校六年間同じ組だった故なお更のことだった。

昭和20年に入ると空襲は本格化し学校も空襲警報が出ると生徒を帰宅させ、夫々（それぞれ）の防空壕に入るようにした。

此の度戦争に関する資料の展示で私が出品した焼夷弾の弾筒の件で述べてみたいと思う。昭和20年3月4日私は学校が休みで珍しく家に居た。3月4日の大本営発表によると「昭和20年3月4日15時30分」本3月4日8時30分頃より9時30頃の間B29約150機、主として帝都に来襲雲上より盲爆せり。右盲爆により都内数個所に火災発生せるも10時30分頃迄に殆んど鎮火せり。とある。従来の空襲と異なる所として新聞解説は次のような事を上げていた。1. 来襲米機数が100機以上であること。2. 悪天候を利用していること。3. 敵機を以て陽動偽満行動を行ったこと。4. 従来の油脂焼夷弾に対しエレクトロン焼夷弾を使用しだしたこと。確か当時大森町六軒（現印西市）の実家に居た私は、午前11時前と記憶しているが、B29の爆音が近づいてくるのを空襲警報下の家の中で耳にした。庭に二つ有った防空壕の一つは貴重品、一つは人の避難用であり中風で寝たきりの父を背負って防空壕に入れようとした。兄2人は応召で居ないので義姉と私は病の父の身が非常に心配になったので再三促したが、父は「此の家の中で死ぬ分には悔いはないよ」と云うことを聞かなかった。今思い出しても極限に立たされた人の心とはこんなものかと思い出される。そして間もなく豪雨が来た様な音がして今の布佐、印西市と利根町の堤防の間の河川敷は、焼夷弾が無数に投下された。東京空襲の帰路投下したものが、今の356号沿いの街並を外れて投下され、枯草の河川敷は一面の火の海となり、油脂焼夷弾は灯籠流しの如く水面を流れて行った。火が静まってから拾ったのが展示した弾筒である。

その5日後の9日夜半、北風の吹く寒い夜、他の先生方とゲートルを巻いて宿直の番をしていた。午後10時半警戒警報、直ちに私は校庭の御真影（ごしんえい）の前に立った。10日零時過ぎ空襲警報のサイレンが鳴り響き、B29の豪音と共に空を見上げると既に本所深川辺りは真赤に燃えていた。B29は荒川上空で超低空で旋回して行った。高射砲弾の直撃を受けて1機は荒川河川敷に墜落し、翼は火を吹いて尾久あたりに落下した。B29の胴体の中に死体のあるのを直後に見た。10万余人の生命が奪われ家が焼かれた、所謂3月

10日の東京大空襲の夜のことは戦争の悲惨さとして私は一生忘れられないと思っている。

その月27日に富山へ現役兵として入隊、銚子へ来て終戦を迎えた。8月15日正午帯剣で整列し玉音放送を聞いた。9月9日復員、教職に戻ったがコペルニクス的転換の社会情勢を考慮し勉強し直そうと決意、21年4月日本大学法文学部へ入学し倫理学を専攻し、焼跡と闇市のある東京へ通学した。そして物質不足の頃、自由に勉強できたことを今も嬉しく振返っている。

60年、戦争のない平和な日本が今在ることを、なお続けなければ歴史的社会的連関の個人の存在を失うことになってしまう。

加害者日本

石坂　　巖（我孫子在住）

これは私の少年時代に耳にしたことです。まだ日中戦争のころで、国内は安定していました。暑い夏の夜などは、クーラーなどありませんから、家の前に縁台を出して、近所の人たちとダベリながら涼をとったものです。ある時、近所の戦地帰りの青年が、私の隣に腰をおろして、中国の戦場の話を自慢げに始めました。彼の話は少年の私にも大変驚くことであった。話は中国で中国軍と戦闘した後のことであった。戦闘が一段落すると、日本兵は争って民家に入り込む。たいていの戦闘は農村地帯で行われ、農家の人は逃げ出して家には誰もいない。そこに日本兵は入り込んで、何をするかといえば、家のなかにかくされている壷を探し出し、フタを開け手を突きこみ、中の貴金属類を取り出し、自分のポケットにしまいこむのであった。当時の中国、とくに農村地方は金融制度が未発達であったから、貴金属類は壷にしまい、お金の必要が生じた時に取り出し、金に換えるか、お金代わりにしていたのであった。村人たちの、そのような大事な貴金属を日本兵は戦闘が終わると、我先にと奪い合ったのであった。この話には驚いたが一層驚いたのは次の話であった。

戦闘が一段落すると、日本軍の部隊は地方の拠点に駐屯する。その青年の所属する部隊も、ある農村地帯に駐在していた。その時のことであったが、日本兵は別々に道を歩いていた、お互いに未知の男性と女性を捕まえてきて、「今ここでセックスしろ、しないと殺すぞ」と銃剣を突きつけ脅迫してセックスさせたということである。その男女が実際にセックスしたかどうか、その話をきいただけでビックリして聞けなかったから、不明であった。

この二つの話は、それまで日本軍は「皇軍」で、この戦争は「聖戦」だと、さんざん聞

かされていたから、少年の私には思いもよらない驚くべき話で、今もって耳から離れないのです。

東京大空襲　－私のクラスは消えた－

岩村　曜子（白山在住）

私は昭和20年3月10日の東京大空襲時、神田松住町（今は外神田一丁目）に住んでいて被災しました。神田明神下にある芳林国民学校（今は昌平小学校）の3年生でした。昭和17年入学時の同学年生は140人でしたが、昭和19年4月から始まった縁故疎開、学童疎開で多くの友人は東京を離れ、残留組と言われ、同校に残っていた3年生は20人位でした。

学童疎開は3年生からでしたので、私の場合1つ下の弟が3年生になる翌春から学童疎開に合流する予定で、神田に残っておりました。私の記憶にある松住町は湯島聖堂、神田明神が遊び場であり、ニコライ堂もその辺りから見え、その鐘の音も朝夕に聞こえました。私の家はＪＲお茶の水駅と秋葉原駅を結ぶライン沿いに神田川が流れておりますが、その川沿いにあり、その川には浅蜊（あさり）舟が往来し笊（ざる）に代金を入れて窓から下ろすと、貝を入れてくれ、それを引きあげる―そんな日常でした。秋葉原には大きな青果市場があり、リヤカーを引いた八百屋さんが前の通りを行きました。前の道は路面電車が走っていました。戦時中とは言えそれなりに、のどかな子供時代を送っていたと思うのですが、いつの頃からか戦時一色に変わっていきました。

今年は東京大空襲から60周年ということで、この2月に我孫子市でも「東京大空襲の体験を聞く会」が行われ、私も語り部の一人に選ばれました。3月10日のことはよく憶えているのですが、前後のことは曖昧なことが多く、これがきっかけで生地付近を訪ね、手がかりを求めて昌平小学校に併設されている街かど図書館に寄ってみました。3月10日の大空襲で学区一帯は焼けおちて、その日を境に学校はかろうじて焼け残ったものの、学童は三学期に再び登校することもなく、散り散りになりました。半端に終った芳林時代と学校を私は懐かしく思い続けておりました。図書室の神田の資料コーナー「失われた学年の記録―昭和 17 年芳林国民学校入学児童の記録―」という小冊子を見つけました（発行は平成17年の8月です）。その時の驚きと感激！！まさにそれは私の学年の記録だったのです。早速座り込んで読み始めました。

その冊子の“はじめに”の言葉があります。

―戦雲急を告げる昭和 19 年、政府は本土決戦に備え、次々と国策を断行した。芳林国民学校付近の強制疎開、学童縁故疎開、集団学童疎開等々、すでに時遅く、空襲に次ぐ空襲、そして20年3月10日の戦禍になる。多くの学友が再び「ふるさと神田」に戻ることなく―語り合う機会もなく、散り散りになってしまった芳材国民学校3年生だった私たちを「失われた学年」と呼称している。―私もまさにその通りで、3月10日被災のあと、混乱の内に、学校をみることもなく、茨城に疎開し、戦後柏に移り住みました。成人後、生地付近を何度も懐かしく訪れたりはしてみましたが、当時につながる情報を得ることは出来ませんでした。同じ思いの方々も多くおられた様で、この数年の間に有志の方々が当時の手がかりを求め活動を始められた様です。都内版の新聞記事も何度かあった様ですが、千葉に住む私の処には届きませんでした。ともあれ、語る会がきっかけで、私にとっての失われた時代へのつながりが得られました。

私の東京大空襲時の被災の体験は、語る会でお話させて頂きました。向島方面と違って、それ程の悲惨の話ではありません。私の場合聖橋の下に避難して、家、家財は失くなりましたが、家族は全員無事でした。ただ、共に避難した近隣の人や友人とも、(1例を除いて)再びお会いしておりません。

私と同学年の芳林国民学校の3年生の場合を、その後の学校生活の変遷の記録から察してみます。

（平成17年8月時）

◎芳林国民学校入学 ⇒ 学童疎開 ⇒ 芳林国民学校・芳林小学校卒業　0名
◎芳林国民学校入学 ⇒ 学童疎開 ⇒ 転校 ⇒ 芳林小学校卒業　5名
◎芳林国民学校入学 ⇒ 学童疎開 ⇒ 転校 ⇒ 転校のまま小学校卒業　15名
◎芳林国民学校入学 ⇒ 縁故疎開 ⇒ 転校 ⇒ 芳林小学校卒業　8名
◎芳林国民学校入学 ⇒ 縁故疎開 ⇒ 転校 ⇒ 転校の小学校卒業　10名

合計 38名

それぞれに、それぞれの立場であの時代を生きました。戦争がなければ、多分芳林小学校を卒業したであろう児童たちが、様々な場所で、様々な生活や小学校生活を送りました。約140人の入学児童のうち、戦後60年にして、やっと38人の消息が分ったのです。その後、私を含めて2人が名乗り出て現在40人の名簿ができている様です。

戦争がなかったならば―。こんな小さな小学校の、ある学年の記録からでも、いろいろの思いをめぐらせ、感慨を深くします。

今、日本は憲法9条をめぐり、「永久に戦争は放棄した！」という方向から、ずれようとしています。あの悲惨な体験をした方々も高齢になっています。

10才であった私の体験からでも、「ノーモア、戦争！」と叫びつづけたいと思います。

私の体験

岡村　　英（湖北台在住）

1．ノモンハン事件と軍国の母

1939年5月から9月にかけて、中国東北部（旧満州）・モンゴル国境で、日本軍とソ連軍が戦ったノモンハン事件が起き、ソ連軍に依り日本軍は戦死者1万7,400人以上を出して完全に敗北しました。

このとき私は、港区麻布寅町19番地の二軒長屋に6人家族で住んでおりました。

同じ長屋の轡田さんの長男が麻布三連隊に徴兵され、出征後間もなくノモンハンで戦死しました。「こんな不孝者でも私にとっては大切な息子でした」といって白木の箱を抱いて泣き悲しむ轡田のおばさんを、私の母はしきりとなぐさめていました。その二人の姿が66年後の今でも目に焼き付いています。

この時、戦争指導者は心置きなく国のため名誉の戦死を遂げろという歌を銃後の母親達に奨励しておりました。しかし息子を戦争に駆り立てられ、戦死させられて喜ぶ母親は一人も居ませんでした。

2．昭和20年3月10日東京大空襲

日本とアメリカとの戦争の末期、昭和20年3月9日の夜半から10日の明け方にかけて、サイパン島を発したB29の編隊300機が東京の下町を中心に焼夷弾爆撃を無差別に行いました。折からの春一番の強風にあおられて、東京の町は見渡す限り焼け野原となり、焼け死んだ人の死骸が道端に転がっておりました。

やがてトラックに乗った兵隊さんがやってきて死骸を青山墓地の敷き地へ葬りました。

昭和34年ごろ青山墓地無縁仏の敷地を整備して東京都立高等学校を建設した時にたくさんの遺骨が出てきて、作業員が気持ち悪がって神主に頼んでお祓いをしてもらいました。私は20歳の時からその高等学校の夜間警備員を勤めておりまして、お祓いのお供物を頂いたことを思い出します。

大空襲の時、私の家は低い窪地にあったため焼け残りました。

高台にあった焼けたお屋敷から小児麻痺で動けなくなっていた「うめさん」というおばあさんを預かってくれと我が家に運びこまれてきました。「私のお父さんは私を殺そうとしたんだよ」とそのおばあさんは私に話し掛けてきました。おばあさんの話を聞いて私は、

成人してからも戦争とはなんと残酷なものかと絶えず考える人間となりました。

小児麻痺のおばあさんの家に炎が立ち上り始めた時、娘夫婦と孫は脱出しましたが、おばあさんの夫であるおじいさんは動けないおばあさんを出すことが不可能なので、ここでこのまま死んでくれと言い残して自分だけ避難しました。避難先でこの話を聞いた近所のおやじさんが炎の中に飛び込んでおばあさんを担ぎ出してきました。そして我が家に運び込んできたのです。自分が生き残る為には小児麻痺の妻のことなどかまっていられないのが人間の追い詰められた本当の姿ではないでしょうか。

生きながらにしておばあさんを焼き殺そうとしたおじいさんが悪いとは思いません、戦争が悪いのです

３．焼け野原を後にして最後の集団疎開に出発

東京大空襲の直後私は焼け野原を後にして、港区麻布笄小学校のまだ疎開していなかった生徒とともに栃木県足利郡三和村宗泉寺に集団疎開しました。お寺の本堂で全員集団生活をしたのですが、衛生状態が悪く虱と蚤が集団発生し痒くて夜もよく眠れませんでした。

疎開先での食事は、朝食が親指よりおおきいジャガイモ７個と中身のほとんど無い味噌汁でした。現地の小学校に登校後、昼までにおなかがすいてたまらず田舎の子供が持ってきていた弁当を盗み食いして、帰り道でさんざん殴られたりつねられたりしました。

急ごしらえの便所は渡り廊下で墓地の中を通り本堂とつながっていました。汲み取り便所で、夜中に一人では怖くていかれません。何人か集団で便所へいきました。

このような劣悪な生活環境でしたので栄養失調にかかり、ミイラのような姿となって父親に引き取られて行った生徒もいました。引き取りにきた父親が「こんなひどい姿になっているとは思わなかった」と一言いったまま泣きくずれていました。

昭和 20 年 8 月 15 日の朝、重大発表があるので全員本堂前の広場に集まれといわれました。

集団疎開先で聞いた昭和天皇の詔勅はガアガア音だけが鳴っていて意味はわかりませんでした。それでも先生達が泣いていたので聞いてみますと戦争は負けたと言っていました。私はああ良かった。これで東京に帰り、自分のうちで腹いっぱいご飯が食べられるとおもって嬉しくてその晩はよく眠れなかったです。

４．闇市・買出し列車

闇市は戦後間もなく新橋駅前機関車広場を中心に、雑炊等飲食物を中心に開かれた市場です。闇市では行列して雑炊を買い求めました。雑炊の原料は進駐軍の食べ残した残飯が主でした。

買出し列車に乗って、日曜日に配給食料の不足を補う為、兄に連れられて東武線朝霞の

農家へ「さつまいも」の買出しに行きました。さつまいも三貫目は小学校５年生には肩に食い込む重さです。

それでも兄弟で買出しをしてきて、途中張り込みの警察官に見つからず没収されずに無事家に帰ってくると１週間分の食料が確保できたといって一家で喜んだものでした。

しかし闇の食料を何とかして手に入れなければ死んでしまうのが現実の生活でした。

戦後の食糧難の時代に、東京地方裁判所の裁判官で一切の闇の食料を拒否して、出された闇の食料を全て子供に与えて、自分は栄養失調と過労で餓死した裁判官がいました。この裁判官の言葉によれば「食管法は悪法である、しかし悪法であっても法は守らねばならない」といい続けて餓死しました。

私達の親は子供の命を守る為に戦前戦中を通して自分は食わなくても子供達に少しでも多くの食物を与えようと必死の努力をしたのです。

「衣食足って礼節を知る」と申します。戦争は、この人間としての最低の条件も破壊し尽くすものだと思います。

もう一度　「核兵器」について

おくだ　あきら（湖北台在住）

広島・長崎の原爆から60年経ってしまいました。核廃絶の願いは先が見えぬまま「原水爆」「核兵器」という言葉も、言葉自体が風化してしまったように感じますので、科学的に正しく「核兵器」の実態を書きます。

①１００メガトンの水爆　核兵器の威力を表すのに、ＴＮＴ（トリニトロトルエン）という爆薬の爆発力に換算すると何トンに匹敵するかという数値で示します。

メガとは100万のことです。キロ（ｋ）が1,000を表すように（例えば1,000メートルを１キロメートルというように）

ですから100メガトンの水爆とは１億トンのＴＮＴ火薬を一度に爆発させたくらいの破壊力ということになります（100×100万＝1億）。

東京に100メガトンの水爆が落ちると言うことは、東京に１億トンのＴＮＴ火薬、４トントラックにすると2,500万台に積んだ火薬です。都民１千万人とすると、お１人様２台半分の強力火薬です。ここには国籍・人種・老若・思想の違いなどは一つに丸まってすっ飛んで燃え尽きてしまうでしょう。

②劣化ウラン　核兵器は大きさだけが問題にされる時代ではなくなりました。アフガニス

タンやイラクで使っている劣化ウラン爆弾で破壊されたり汚染された戦車や建物の残骸から出ている放射線によって多くのガン患者が出ています。

（「劣化」というと品質・性能が衰えたという意味ですが、劣化ウランの「劣化」とは、ウランの濃縮工場で処理した後に残ったウランのことを言います。ウラン235の含有率が天然ウランより少ないということです。一口にウランと言っても、いろいろな種類があって、その中で放射線を出す危険な物がウラン235です。ですから劣化ウランも放射線を出していて危険なのです。劣化ウランは硬い物なので戦車や建物を壊すために爆弾にも使っているので、性能が悪い爆弾ではないのです。）

③最後に一言

核兵器は人間が作ったものです。それを無くすることは人間がしなければならないことです。しかも、それは緊急の課題であるし、その努力に勝るモラルはないのではと思っています。

受難の猛獣たちのうめき声
～時局捨身動物たちの霊今いずこ～

織田　和男（若松在住）

ウーワーウォーウォーワー...、猛獣のうめき声のような遠吠えが、真っ暗やみの上野の森に響きわたる。いつも聞こえて来るオットセーかアシカの甲高い陽気ななき声とは違う、声にならない苦しいそうな呼吸が、地響きにちかい無気味な空気を伝えている。

ときは、東京空襲が激しさを増す昭和18年8月の灯火管制下。ところは、上野動物園の裏門が見える谷中清水町の住まい、上空に敵機をむかえる庭の防空壕の中、たしか12歳だった。

上野動物園は、それまで私にとっては人気ものの象・トンキーとワンリーに会える遊び場だった。

それが、あのうめき声が聞こえた8月中頃（今調べてみると8月20日前後か）から、動物園の様子が一変。夕方を待たず係りの人が急いで閉門を告げ、人影は殆んどなかった。

其の頃「動物園の様子がへんだ」と言う噂が、近所でも囁かれていた。この真相は、まもない9月4日の東京都主催の動物（27頭の毒殺された時局捨身（しゃしん）猛獣）慰霊祭で公になった。

“猛獣のうめき声”で忘れないこの事件は、私の戦争体験の中でも特別なもの。

最も衝撃的なものは、鶯谷駅の陸橋からお化け煙突へ続く焼土と累々とした屍（しかばね）の惨状を目の当たりにした時である。戦争体験には色々あるが、個人個人の心の深層に迫ったもの、命や霊魂に結びついたものほど忘れ難いものはない。

受難にあったあの象・トンキーとワンリーの霊が独り言を言っているのか、いまだに耳もとに残る。あのうめき声の正体を再確認するため、当時の福田三郎動物園園長代理の本「実録・上野動物園」と「上野動物園100年史」で記録を調べてみた。

毒殺処分を命じられた当時の記録では、昭和18年8月16日福田三郎氏は、東京都公園緑地課長に呼び出され、猛獣処分の理由として「空襲が激しくなり周囲の住宅地（花園町・谷中清水町・上野桜木町など）へ猛獣が逃亡する危険があること、食糧難により飼料の調達が困難であること」と表向きの説明を受けた。

上野動物園は、1頭でも動物たちのいのちを救えないかと、名古屋・仙台動物園への疎開を検討した。しかし監督責任者の大達茂雄都長官は許可しなかった。それは動物の犠牲やむなしとする時局認識と耐乏生活への覚悟を民間人にも浸透させる、戦時体制の強化策だったからで、飼育担当の心の葛藤など許されず、妥協の余地のない通達だった。これは、ほかにも例がある。食料や皮革にする赤い犬の献納・捕獲など、お国のためと命をささげた戦時中の時局捨身動物の末路なのだろうか。“お上のお達し”は最優先。勿論、毒殺や絞殺に立ち会わなければならなかった担当者の胸の内は察してあまりあるものがある。

灯火管制の厳しい高射砲陣地に要塞化された上野の山。その夜空に響き渡った猛獣のうめき声は、苦しがるトラかライオンか、空腹を訴える象の鼻息か。

8月17日から9月23日まで続く。ライオン3頭、ヒョウ4頭、トラ1頭、チータ1頭、クマ8頭など、27頭が次々に処分された。死骸は、こっそり陸軍獣医学校へ運び出され、猛獣の檻は、軒並み空っぽになり静まり返っていた。

しかし、象の処分は難航した。硝酸ストリキニーネによる毒殺は、餌を与えず、ふかしたサツマイモやジャガイモを混入させ食べさせた。象は悧巧で毒入りの餌を食べなかった。オス象・ジョンは絶食で処分した。

それでも9月4日の慰霊祭の時には、メス象のトンキーやワンリー、ヒョウがまだ生きていた。

やせ細って餌をねだるトンキーに、こっそり餌をあげたものがいた。

この時の象の様子を、我孫子市民図書館にもある金の星社の「かわいそうなぞう」には、「しなびきったからだじゅうのちからをふりしぼって、げいとうをみせるのでした。げいとうをすれば、むかしのように、えさがもらえると、おもったのです。」と書いてある。

何故か大人の読者にも、生なましくせまる重いものを感じる。20何日か絶食との戦いの

末、象の最期がやってくる。それは迎え火も焚けぬお盆の頃だった。

あれから早くも 62 年、上野動物園は子どもたちで賑わいをみせている。昭和一桁生まれの私には今、受難のトンキーたちのうめき声が、「戦争はいやだ」と叫んでいるように聞こえる。

戦後 60 周年に思うこと

海津　にいな（つくし野在住）

手賀沼公園に、広島の慰霊碑を模した三角形の平和の記念碑（モニュメント）があるのをご存知でしょうか。暑い 8 月に、被爆者の会主催による平和記念式典が続けられてきました。「広報あびこ」の式典日程に目を留めて初めてに行ったのは、丁度１２年前でした。

その夏は、我家にアメリカ人高校生が３ヶ月ほどホームステイしました。間もなく帰国というのに、一度も手賀沼公園に連れて行ったことがなかったので、平和式典の日時に合わせて行ってみました。週末の朝であり、人数の少ない式典には近づきがたい雰囲気がありました。その様子を見ながら、しかし被爆地でもない我孫子で、なぜ原爆慰霊祭をしているのだろうと不思議になりました。

『ヒロシマ・メモリー、千葉県我孫子市に生きる被爆者』（1982 年：市職員組合刊行）の本を手にし、千葉県にも被爆者が３千人以上もいると知ったのはそれからでした。終戦前年（1944 年）、徴兵年齢の改正で 18 歳にまでに引き下げられ、更に多くの若者が出征しました。我孫子からの配属先は佐倉の連隊であり、「総武第 2795 部隊」として再編、原爆投下前後に広島市内に入り、一次、二次被爆者を多く出したのです。

終戦の年に、広島郊外の加茂郡原村（八本松）に歩兵第 321 連隊（約 3200 人）として駐屯していたのが、「我孫子市原爆被爆者の会」（1978 年、会員 90 名）を発足させた染谷政富氏でした。1979 年には、我孫子市職員組合が協力して、聞き書きの本を作ることになりました。“藤正（ふじまさ)さん”と親しまれた革新市長の渡辺藤正氏のときに、戦後 40 周年となり、平和都市宣言がされました。折しも、旧広島市庁舎の取り壊しを知った染谷会長（当時 70 歳）は、被爆石を譲り受けて記念碑を建立し、平和の尊さを語り継いでほしいと奔走、議会も平和記念事業のひとつとして承認しました。被爆者の会は軽トラックを借り、柏、八千代、野田、酒々井の分も譲り受けて、各市の平和記念碑の礎になったということです。被爆した旧庁舎の敷石・側壁の石は、しばらくの間市役所ロビーに置かれ、除幕式（1986 年 8 月 6 日）で平和記念碑の前面に設置されました。記念碑が出来たころ

は、アビスタが建設される以前の旧公民館の頃で、木立に囲まれ人目にあまり触れない場所でした。真夏の8月に、市長、議長らも出席し平和記念式典は続けられてきました。

あるとき、助役に我孫子の生徒たちも参列させてはと話したことがありました。原爆投下の際に広島にいた助役は、「被爆者の方々がお子さんや孫を参列させないし、まして被爆者である事を他言したくないと思うのだから、市内の生徒を参列させることは難しいのでしょう。」と言われました。被爆者は、放射能の影響による健康不安ばかりでなく、就職、結婚などで差別を受けることもありました。そのため被爆者手帳も申請せず、専門医療を受けない人が多くいたのです。『ヒロシマ・メモリー』に協力した被爆者でも年齢性別の記載だけで、名前を明らかにしているのは染谷会長だけです。

戦後60年たって、被爆者の方たちは相当に高齢となられました。今年は、市内の中学生らを含め、100人を超える参列者を被爆平和記念式典に招き、戦後60周年の黙祷を捧げ、二度と戦争を起こさないようにと平和を祈りました。市内生徒の代表は、四半世紀ぶりの我孫子からの平和使節派遣として、広島の式典にも参加しました。広島派遣で生徒たちは、救援活動での二次被爆やお母さんのお腹での体内被爆、強制連行で被爆した中国・朝鮮の人たちが多くいたことも知ったでしょう。後世に原爆の恐ろしさ、悲惨さを伝え、若い人たちに平和の尊さを語り継ぐようにと被爆者の会は記念碑を大切にしてきました。

我家にホームステイした高校生は、米国で“Barefoot Gen（はだしのゲン）”（中沢啓治・原作）というアニメを授業で見て、原爆の恐怖を知ったのでした。日本人が焦土と化した国を復興させたのに感心し、一粒の麦のように芽を出していく日本人の精神力に敬服したと話していました。被爆者の凄まじい苦しみにショックを受けたし、当時に学生だったなら大統領に抗議したと言うのでした。ある被爆者に彼女の話を伝え、「外国人にも我孫子の記念碑の意味が分かるようにするといいですね」と話したことがありました。国際交流のボランティアにより、英文の説明も加えられ、銅版プレートが設置されました。この留学生の話は、「AIRA（我孫子市国際交流協会）」の広報紙に紹介されました。干支が一回りした酉年の2005年、その彼女から「結婚しました。佐世保に住んでいます。赤ちゃんが生まれます。」と便りがきました。我孫子からの祈りが、世代や国境を超えて語り継がれ、平和を護るようにと心より願っています。

昭和20年「3月10日」と「8月14日」‥‥

笠松　経子（白山在住）

昭和17年3月、私は台東区蔵前三丁目で生まれました。東京に初めての空襲があったのは、生後21日目のお風呂を使っていた時とのことです。

★20年3月10日　東京大空襲

炎の中を私は母に背負われて父と祖父と4人で逃げました。真っ赤な空に認められたほんの少しの黒い隙間（上野の森）を目指して。父は「手に何も持つな」と言ったそうです。途中で祖父とはぐれ、翌日（？）祖父を探しに行った臨時の区役所で母は死亡者の掲示に私たち三人の名を見つけて「祖父が届けたのだ」と祖父の生存を知ったのです。後の祖父の話では何処かの防空壕でじっとしていて助かり、私達を探して家の前に行くと親子三人と思われる焼けた死体を見て「逃げ切れずに我が家に帰って死んだ」と思ったとのことでした。

あの日炎の中を逃げて生き残った子は蔵前三丁目では私一人というのです。疎開していたか学童疎開していたか以外の子は全滅したと。私たちが逃げる途中に水欲しさに防火用水の蓋を開けたら赤ちゃんの死体が浮いていたそうです。私も母の背でぐったりし、泣き声もしないのでもう死んだかと、思いっきり足をつねったら泣いたので生きていると喜んだとも話していました。

戦後、母は山手線の中で偶然にも当時の隣家の主婦と出会いました。隣家には私と同年のショウちゃんと呼ぶ男の子がいて私の遊び友達でした。隣家一家は炎の暑さに耐え切れず隅田川に入り、負ぶい紐が解けてショウちゃんは流されていきました。ただ一人生き残った彼女の顔にはケロイドがあったといいます。我が子が流されて沈んで逝くのをどうすることも出来なかったその母の心はどのようだったでしょうか。

昨年「東京大空襲・戦災資料センター」を訪れました。‥‥黒こげの死体が積み上げられた道・トラックに放り上げられる死体・人間の体の油で染み付いた道路‥‥などを母に聞かされていた私でも資料を見て「あの中の一人は私であったかもしれない」とただ涙で見学しました。当時の地図とそれに戦災箇所が染められた地図があり、私の生まれた家はまさに全滅の所でした。

★20年8月14日　父の召集

私は父の40歳時に生まれた一人っ子です。父はどちらかの足を幾分引きずるように歩いていた人でしたが、ついに20年8月14日に佐倉の隊に入隊したのです。その日には無条件降伏していたのに、です。「玉音放送」まで降伏が発表されなかったために「残務整理」

の兵士で１年間過ごし、帰った時は栄養失調で靴を履く力も無く、入退院くりかえして48歳で亡くなりました。

私にとっては病気であっても父に愛された記憶が残りましたので戦死よりは良いと思っていますが、病身で働けずに過ごした日々は辛かったでしょう。国保も無い時代に母はどれほどの苦労をしたでしょうか。今やっと理解できます。その母はこの我孫子で 90 歳の天寿を全うしました。

独・伊が降伏しても日本が戦争を続けて、沖縄・広島・長崎の悲劇が避けられなかったのはなぜ？原子爆弾が落とされてもなお、ソ連が参戦してもなお、終戦が遅れたのはなぜ？

天皇の処遇についてでしょうか？「玉音放送」が１日早かったら、父はもっと生きられたのに。

「世界報道写真展」をほとんど毎年見に行きますが、何時でも、何処でも「戦争」があります。そして命が奪われています。『なんのために』戦争するのですか？殺しあうのですか？

私には今８歳と２歳の孫娘がいます。この子たちが「女性兵士」となるような日を、決して、決して迎えさせてはなりません。

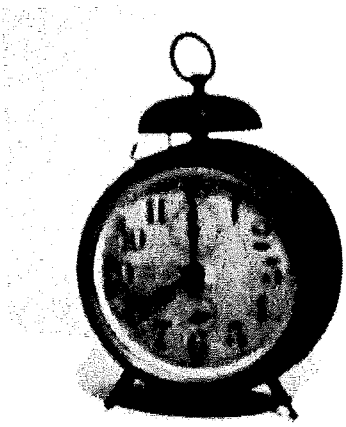
今年、改めて思います。東京大空襲で一度死亡届が出された私にこれから何年「生」が続くかはわかりませんが、大切にそしてどんなに小さくとも「平和」「反戦」を願って生きなければならないと。

終戦当時、三歳であった私が　母の言葉から知った体験を書きました。

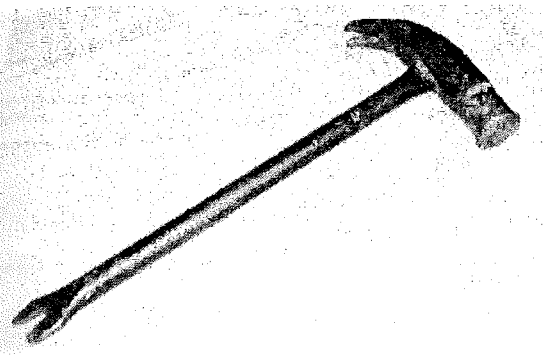
戦中・戦後の諸々な体験から

栗原　忠聖（つくし野在住）

～小さな古時計と金槌が、語りかけてくること～



少し前、アメリカ民謡“大きなのっぽの古時計”が話題になりましたが、写真の“小さな古時計”と“金槌”は、私にとって大切な宝物です。東京大空襲被災等や戦中体験・戦後の衣食住不足時代にまつわる諸々な体験や当時の父母・姉が大変苦労して私を育ててくれた様子を、この宝物は思い出させてくれます。幾つかの戦中・戦後の体験を次に紹介しますが、これらは、



平和な現在を実感させ、感謝させてくれるのです。

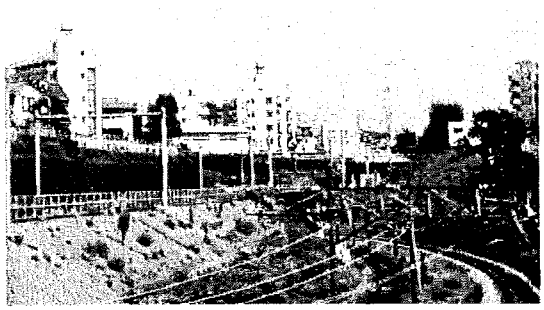
１．昭和19年：40Kmの道のりを、多くの荷物をリヤカーで運ぶ（13歳・中学２年生）

昭和19年、私は東京駒込に住んでいました。戦況が不利となり東京空襲の危機も迫り、大切な家財道具などを被災しないために、各家で自ら運ばなければならなくなったのです。前年父が55歳で脳梗塞、右半身不随になり頼りに出来ないので、末っ子・長男13歳の私が一人で対応しました。当時軍事教練や勤労動員などもありましたが、飢餓時代で、私は栄養失調気味の貧弱な体格でした。

リヤカーを自転車に針金で接続して、父の知人の家へ約40ｋｍ（東京から埼玉県川越付近まで～当時・陸軍練習機飛行場：現・本田技研飛行場）の行程を悪戦苦闘して運びました。荷物の重さや運搬距離の長さに加え、特に中規模の川を越えるのに苦労しました。それは堤防間に橋が架かってなく、堤防を越えて川原にある仮設橋を渡り、さらに堤防を越えて行くような按配だからです。堤防越えと、堤防内の仮設橋を渡る際、一つ一つ荷物を降ろし運び、自転車、リヤカーも別にして運んだのです。仮設橋も物資不足時代ですから廃材で作られた橋で、下の川が見える様な隙間があり、１人渡るだけでも相当揺れ、その怖さは大変でした。しかも、戦争中ですから近所には手伝ってくれる人もいない状況でした。１日がかりで着いて、いただいた夕飯の味は忘れられません。翌日、多少の食料などをいただき東京に戻りました。今でもその時運搬した家財道具を見て、当時を思い出し、現在を感謝している次第です。

２．東京での戦災体験・ドブの中に多数のマネキン！？　〔昭和20年４月18日〕

昭和20年４月18日東京大空襲を経験したのが当時14歳です。先日、ＪＲ・山手線で２箇所しかない踏切が報道されましたが、その一つの田端～駒込間に存在する踏み切りの近くのトンネル内で、一命をとり止めたといっても過言ではありません。



山手線；田端～駒込の中間・踏み切りの近くからトンネル方面の様子（2004.８撮影）

空襲を受けた時、脳梗塞後遺症の父と母とは先に避難してもらい、10歳上の姉と共に防空壕に荷物を埋め、当時自分にとって大切な教科書類などを自転車に載せ“目覚まし時計”〔写真〕を括り付けて避難したのです。火や煙に追われながら安全なところを探しつつ逃げ回り、最後にこのトンネル内に逃げ

込みました。空襲が終わり翌日夕方トンネルから出てくる人が、全身煤で真っ黒で誰だかよく判らないくらいでした。踏み切りの所から我が家の方向を見ましたが、一面焼け野原、煙の合間の高台に駒込病院と思われる建物が燻ってポツンと見えたのが印象的でした。焼け跡で見つけた唯一の物が変形したこの写真の金槌でした。踏み切りの近くのドブを見ると、その中に首を突っ込んでいる焼け爛れたマネキン様のものが多数見えたのです。実は、近くの養老院に入居しておられたご高齢者の方々が逃げ遅れ、火炎の熱さでドブに顔を突っ込み毛髪も衣服も焼けて裸同然で、苦しんで亡くなられた痛ましいお姿だったのです。昨年 10 月、近くの出身小学校にこの種の記事を寄贈に行った時、この場所を訪れてご冥福をお祈りさせていただきました。

3．戦中・戦後の思い出から・・・

1）自転車のタイヤが？・・　戦災後、避難先の埼玉県川越で中学転校許可も得て軍事工場勤務があったのですが、行くことが出来ませんでした。工場まで避難先から 7ｋｍ以上もあり、助かった自転車のタイヤに穴が開いてしまい通えなかったのです。

当時、軍需物質である自転車は、一般人には部品すらも買うことが出来ず、この様な場合古いタイヤのましな部分を切り取って損傷部分に被せる様にして補強して、使ったものです。当然タイヤに凸凹が出来るので、長距離走れる状況ではありませんでした。

2）飢餓時代の経験　昭和 20 年 9 月 27 日、今の東京練馬区関町にいた親戚を頼りに姉と下宿し、近くに家を確保出来て家族が揃いましたが、食糧難の時代であり、母の着物などは米との交換、すいとん、雑炊やサツマイモの茎はよい方で、豆かすや雑草の“あかざ”“ひょう”時には”飲みかす茶殻“等まで食べたのを思い出します。

3）合成甘味料”サッカリンが給料〔昭和 21～23 年〕　姉が勤務していた製薬会社から、当時、貴重品であった甘味料“サッカリン”が給料代わりに支給され、それが高く売れて生活費にしたことが印象的です。私の学生時代に合成した経験もあります。

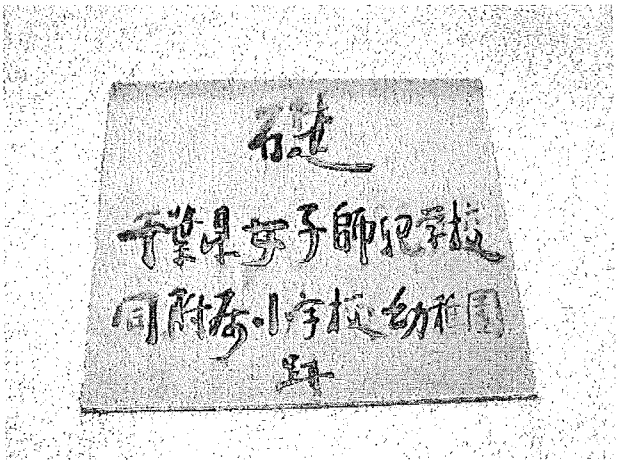
4）靴が入手困難な時代・雪の中・裸足で姉を駅まで迎えに[昭和 21 年冬]

大雪の中、家から約２ｋｍの夜道を下駄履きで、吉祥寺駅まで姉を迎えに行きました。途中で下駄の鼻緒が切れ、裸足で千切れそうな冷たい思いをして雪の中を滑りながら必死になって歩きました。雪の降る度にこの事を思い出します。長靴や革靴も入手し難い時代でした。

生きているかぎり戦争は『ノー』と叫びつづけたい

栗山　栄子（中里在住）

千葉駅に降り、県庁に向いて左側の歩道を 20 メートル程歩くと、車道添いに下写真のすかし彫りの石碑がたっております。



千葉女子師範学校、同付属小学校、幼稚園跡と記されておりますが、この碑は単なる女子師範学校の跡地を示したものではなく、昭和 20 年 6 月 10 未明、米機 B29 が来襲し、爆弾を投下、直撃による犠牲者、教官 1 名、雇員 1 名、生徒 10 名の名前が刻まれた銅板が埋め込まれている慰霊碑なのです。(戦前の千葉駅は現在の東千葉寄りでした) ※同級生が呼びかけて同窓生から寄付金を集めて建立。※私は昭和 17 年 4 月、女子師範学校の一部 1 年生でした。父を小学校 1 年生に入学して間もない 6 月に亡くし、母は実家の世話になりながらも、女手一つで私に師範学校への道を選んでくれました。勿論、その時の湖北小学校の川村敏郎校長先生（我孫町の初代教育長）や受持の先生の熱心なすすめもあったからですが。母には、女性の自立という強い思いがあったようです。

千葉の大空襲で亡くなられた 10 名の方々は、私より 1 年早く入学された上級生でした。それぞれの親御さんにも、私の母のような思いがあったかも知れません。戦争さえなかったら、娘は立派に先生になって、どんな人と結婚しただろう。どんな孫が生まれただろうか。等々、事ある毎に思い続け、人知れず涙を流されたのではないでしょうか。

私は師範学校に入学したものの、戦況は日々激しく厳しく、国をあげての有事体制で、3 年生の昭和 19 年 12 月 12 日、川崎にあった日本冶金（やきん）株式会社川崎工場に動員されました。飛行機の機器を作る工場でした。作業は製図、分析、プロペラ製造、魚雷の鋳型作り等でした。

工場の寮に宿泊して、大豆入りの三分搗（つ）きぐらいのボロボロしたご飯に、うすいうすい味噌汁をかけて食べていました。食事が終ると、祖母や母の黒っぽい縞（しま）や

絣（かすり）の着物地をほどいて作った和服式の上着にモンペを穿き、防空頭巾と非常袋をたすきに肩からかけ、足並揃えて軍歌を歌いながら工場まで 15 分位平常歩で通いました。

私の仕事は、プロペラの端を僅かに削り取った粉片（ふんぺん）の定量に、化学薬品を入れてプロペラの合金の一つである銅の量が適量かどうか、分析して調べる仕事でした。仕事そのものは軽作業でしたが、正しく分析して数値を出さないと、搭乗者の生命にかかわる事故の原因になるのでは・・・・・と緊張して作業をしたことを今でもはっきり思い出します。

戦争が熾烈さを増すにつれ、川崎は市内全体が軍需工場だったので毎晩空襲があり、防空壕から出たり入ったりの毎日でした。そんな状況を先生方が心配されて、まだ千葉の方が安全ではないか、すでに本校の各教室にも日立航空機千葉工場の旋盤が入って、在校生は1日3交替で働いておりましたので、国の学徒動員本部に願い出、在校生と一緒に働く方が安心だと昭和20年6月9日、川崎から千葉の本校に帰ってきました。

長い間家を離れて川崎にいたということと、その日が丁度土曜日だったこともあって、1 日だけ外泊が許されたのです。川崎から持って帰った僅かな衣類や日用品を、学校の寄宿舎の部屋の自分の押入れに戻して、昼頃母や祖母の待つこの湖北の新木の家に帰りました。

久し振りに、麦飯だけど大豆の入らない夕御飯を腹いっぱい食べて、ゆっくり休んだ翌朝、ラジオのニュースが千葉市の空襲を報じていました。門限は午後5時でしたが、学校が心配で一刻も早く帰らねば、と確か 10 時頃の列車だったと思います。心急くまま成田に着きました。ところがダイヤがすっかり狂って千葉行きの列車が出ません。千葉へ着いたのは、やっと午後6時頃だったと思います。

駅はあったのですが、何もかもつぶされ焼かれ見渡す限り焼野原でした。やっと昨日通った道を探しながら学校にたどりついてみるとその学校も寄宿舎も、付属小学校も幼稚園も何もかも息をのむ惨状でした。

前記 10 人の犠牲者は、即死した人、病院へは運ばれたがまもなく息を引き取った人、様々だったそうですが、帰校した私達の誰もが声もなく立ちすくみました。が、まだみつからない一人の上級生を探しまわりました。薄暗くなりかけた頃「○○さんの防空服の端が見える」と声を上げた人がいました。付属小学校の玄関の太い鉄筋コンクリートの柱が倒れたその下から、僅かにのぞいている布端でした。あの豪惨な状況は、60年後の今も目に焼きついておりますが、文字や言葉には言い表せません。

もう数十年前だったと思います。朝日歌壇に下のような歌が載ったのを覚えています。

戦争はいのちかけても阻むべし

　母　祖母　おみな牢に満つるとも

記憶のままに綴りました拙文ですが、教師をしていた 14 年間も、議員にしていただいた 39 年余も、そして生きているかぎり戦争は『ノー』と叫びつづけます。先に記した千葉駅前の霊にも公約して。

昭和ひとけた生まれの雑感

菊池　正伍（泉在住）

1）幼少時代；

小生は、昭和８年生まれ、岩手県出身で農家の四男ですが、**大東亜戦争**（後に太平洋戦争、または第二次世界戦争といわれた）を田舎で経験しました。

父は、日清戦争で支那の山西省において頭部に銃弾を受け戦死し、靖国神社に奉られております。

当時は尋常高等小学校（後に国民学校と改名）に入学し、昭和 16 年 12 月８日は戦争勃発の記念日として、村の招魂社に参拝し**出征兵士の武運長久**を祈ったものであります。

戦争開始後は、頻繁に 20 歳以上の青壮年に対して、**赤紙の召集令状**が届くと、学校では村の中央にあるバス停留所前に整列し、日の丸の旗を振りながら、出征兵士を送る軍歌を歌い気勢を上げて軍人を送り出しました。

イ）勝って来るぞと勇ましく　誓って故郷を出たからは　手柄立てずにいらりょうか
　　進軍ラッパ聴くたびに　瞼に浮かぶ　旗の波

ロ）海行かば　みずく屍（かばね）　山行かば　・・・・　かへりみはせじ

ハ）父よ　あなたは強かった　兜を焦がす　炎熱を　敵の屍とともに寝て　泥水すすり
　　草を噛み・・・・

ニ）若い血潮の予科練の　七つボタンは桜に錨　今日も飛ぶ飛ぶ霞が浦にゃ・・・・

など、お国のために天皇陛下万歳で戦死する教育を受けました。

戦死者の葬式は村の行事として執り行われ、白い字幕のノボリを立てて涙を流した記憶があります。

ハワイ島の真珠湾攻撃で始まった戦争が進むにつれて、シンガポール陥落・ニューギニア作戦・ガダルカナル作戦・アッツ島玉砕・東京大空襲・沖縄本土決戦など、広島・長崎に原子爆弾の投下によるピカドンの壊滅的な攻撃の前に、**無条件降伏**を決断し、終

戦を迎えました。

昭和20年（1945）8月15日は、終戦勅語が今上（きんじょう）天皇陛下よりラジオ放送され、堪へ難キヲ堪へ　忍ビ難キヲ忍ビ・・・・・・とぎれとぎれの放送を聞き、やはり神風は吹かず、戦争に負けて、アメリカに全面降伏するとのポツダム宣言を姉から聞き、涙を流しました。田舎での空襲は、グラマンF戦闘機とB29爆撃機が岩手の上空にも飛来し、田植え中の農民への機銃掃射を目の当たりにした経験が思い出されます。機関銃の弾が発射されるダーダーダッタの凄まじい音声は忘れることはありません。

2）戦中・戦後の生活

戦時中は、食料増産に励み、学校の校庭やグランドなどで、ソバ・ジャガイモなどを栽培し、鉄砲弾の原料となる**鉄製品の供出**（神社の釣鐘・仏壇の祭壇金物など）や、飛行機の燃料にする油の原料に松根油を掘る土方も経験しました。食料は少なく、豆ご飯などの力テ飯が常識で、魚・砂糖などすべて配給制度を経験しました。

食料が少なく、米を主食とする人は、**外食券**を利用しなければ食堂で外食できない制度が暫く続きました。砂糖が少なく、甘味をつける食事材料として、田舎では米より水飴を作ってアンコ餅に入れたり、南瓜の甘味を利用したスイトンが思い出されます。戦後は食糧不足で悩みましたが、配給制度とやみ米で生き延び、外国との貿易が盛んになり、食糧の輸入が自由化され、日本の農業はすたれ、専業農家として生活できない事態となり、耕地は荒れ、農業の後継者不足で、昔言われた、**士農工商**の言葉が思い出され、農業立国の必要性を痛感いたしました。

3）農作業の変化

戦時中は、今でも東南アジアでみられる**旧式の農作業方式**（馬・牛による田起こし・人力による田植え作業・稲刈り・脱穀作業など）は戦後急速に米国の**大型機械化農業**と水田の区画整理（圃場整備）が進み、人力から機械作業へと大改革が行われ、村にもゴルフ場が出来るなど、農地が近代都市化し、今では、農業の後継者困難の事態になり、担い手育成事業など農林水産省では農村の法人化（株式会社など）に向かっており、**食糧の自給率向上を目指**すも、米の生産調整と価格維持のため**減反政策**など世界的に食糧が不足している現在、誠に矛盾した、人道的に反する政策があるのも事実です。自然の恵みである、水と耕地を大切にし、緑を増やす工夫が叫ばれております。幸い日本には砂漠は存在せず、気候温暖で雨水に恵まれ、有機栽培に適する**土地の活用を図る**ことが大切です。

小生は海外生活を長く経験しましたが、東南アジア諸国の食糧不足は誠に深刻で、遊休農地の開発と稲作政策の増進を行い、**餓死による犠牲者**を救わなければなりません。

国敗れて　耕地荒れ　娯楽に生きる　悲しさよ　日本人が遊んで　外人が重労働・出稼ぎなど　何処か矛盾を感じる此の頃です。

4）終わりに

戦後生まれの皆さん、是非とも沖縄本土決戦や広島・長崎の原爆記録と悲惨さを知り、戦争を二度と起こさない決意をし、平和憲法を守ってください。

また、是非とも国土を生かした、自給自足で輸入に頼らない生活の基礎を作る政治を作ってください。

一方、産業労働者などのサラリーマンは、労働組合運動に取り組み、憲法で保障された、最低生活の保障を目的にストライキを毎年決行し、初任給が大幅にアップし文化生活をエンジョイしておりますが、農民の暮らしは楽にならず生産物の価格はあまりにも低すぎます。農政に希望の持てるビジョンを政治に反映させてください。

十五年戦争をふり返って

早乙女　菊王（高野山在住）

国民精神総動員運動：国家総動員法

今年は、日本がかつてない太平洋戦争を引き起こして、世界に大きな惨禍をもたらし漸く敗戦により終結、平和を迎えて60年にもなる。長く苦しかった15年も続いた戦争。今ふり返って、私の戦争体験をのべてみたい。

日本が戦争を始めたのは昭和6年（1931）。関東軍が奉天の近く柳条湖で、自ら満鉄を爆破しそれを中国軍の仕業として攻撃を始め、忽ち全土を支配した。これが満州事変で戦争の始まりである。当時日本は深刻な不況が続き、中小工場、小売商などの倒産で失業者があふれ、自殺や一家心中夜逃げと悲惨な状況だった。また東北地方は大凶作で欠食児童がふえ、娘の身売りと暗い世相を伝えていた。そうした背景の中、軍部が勢力を持ち広くゆたかな満州を支配した。その頃から国家主義風潮が急速に進み、昭和12年北京近く盧溝橋での前線兵士の衝突をきっかけに、平和的解決によらず日中戦争へと突き進み、日本軍は次々と占領、連戦連勝し南京陥落の時、国民は熱狂し国中が沸きたっていた。（日本軍は占領の折、大虐殺事件をおこした）

当時私は中学2年、全校生徒と共に戦勝を祝い、日の丸の小旗を持ち昼も夜も行進した。街中の人が道路の左右につめかけ、旗をふりかざしバンザイ、バンザイの声援の中、私は興奮して行進していた。その後、日本軍は中国軍や民衆の抵抗をうけ、戦争は泥沼の深みに入り百万に近い軍隊は膠着状態におちいった。

一方、国内では国家総動員法が制定され、国民精神総動員運動を実施して、戦時体制を強化していった。私が中学（旧制）へ入学した頃は学校で教科の中に軍事教練があり、もと軍人の将校が指導され5年間も行われていた。卒業して戦時下に建設された新しい大泉師範に入学。当時、この学校は修練の道場としての全寮生活、武教主義にもとづく教師練成の皇国教育で軍事教練は実践さながらの指導であった。私が入学した昭和 16 年米英に対する宣戦布告があり、直立不動の姿勢で緊張のうちに聞いた。卒業して第一大島国民学校へ赴任、高等科を受けもった。当時は国民学校といい皇国民錬成に明け暮れていた。朝の軍隊式集団登校、敬礼、整列、行進、冬でもハチマキ裸の乾布マサツ、銃剣術、体操、女子は薙刀（なぎなた）、防空避難訓練とあわただしかった。地域は軍需工場が多く親たちは徴用工員として必死に働いていた。店はすべて閉鎖され、どこを探しても食べ物はなく、わずかの配給で飢えを凌いでいた。街には「欲しがりません勝つまでは。」「撃ちてし止まむ。」のポスターが至る所貼られていた。

そうした中で若い私はひたすら聖戦と信じ忠君愛国の精神で小国民の錬成に励んでいた。当時は 20 歳になるとすべての男子は病人を除いて軍隊へ入隊する制度があり、私は海軍と決定していた。まもなく入隊の日は来、教師生活わずか7ヶ月で教え子と別れ、歓呼の声に送られ横須賀海兵団に入団した。新兵の訓練は翌日から始まった、総員起し、釣床（つりどこ）、カッター、甲板掃除とすべて競争で、少しでも遅いものは消燈前、班長の説教の上、海軍精神棒のバッターで思い切り尻をたたかれるのであった。

まもなく私達師範兵は急きょ下士官候補として鬼の館山といわれる砲術学校へ入隊した。そこは海軍といえども食事はひどく少なく、地獄のような猛訓練で陰惨な暴力とバッターで兵隊はみなうす汚れてやせ細っていった。そして任官と同時に横須賀軍港を守るべく近くの金沢山砲台に戦闘部隊として配置についた。そこは森に囲まれ、中に兵舎があり、海軍高角砲が四門海に向かって備えてあり兵隊は 200 名近く死を間近に感じてか、下士官、兵の差別や暴力がなく、みなが一体となって砲戦訓練が行われていた。

時折、B29 が偵察の為か高度1万メートル上空を通り過ぎて行く。その頃3月 10 日東京大空襲があり、もえ広がる赤い炎が不気味に夜空を照らし不安な気持ちでいた。まもなく B29 が編隊をくんで高度を下げて来、近くを爆弾を投下していく。私達は緊張して照準を合わせる。そうしたある日 B29 がいつになく大編隊をくんで次から次へと来襲して攻撃を始めた。私達は必死になって迎撃していた。その時、雲の間よりグラマン戦闘機が数機姿を表し突如急降下銃撃して来た。私達は砲台の防空壕にとびこみ助かった。が、数名の兵が重軽傷を受けた。その時、身の凍る思いだった。

その頃戦局はいよいよ悪く海外では既にガタルカナル、アッツ島、サイパン、マリアナ、

レイテ沖海戦と次々惨敗、玉砕、餓死、と悲惨な状況が続き、国内では東京大空襲、米軍沖縄上陸、住民の集団自決が相ついだ。それでも軍部は戦争継続を表明、国民に本土決戦を呼びかけ竹槍をもって戦うことを強制した。が、米軍のB29による史上かってない原爆を広島、長崎へと投下され、8月15日、遂に日本は連合国に無条件降伏して世界大戦は終った。思えば長く苦しい15年戦争、日本ばかりか中国、朝鮮を始め太平洋各地に計り知れない被害と犠牲を与えたことを深く反省し、今、再び戦争への道を繰り返してはならないと思う。

祖父からの手紙

高藤　妙子（根戸在住）

信一君　今年はとうとう夏休みには信州に来られなかったね。

君も知ってのとおり8月15日は早くも第38回目の終戦記念日だったね。君たちが夏休みにでも来た時には少しでも将来の参考になるよう、おじいさんの戦争体験を話しておきたいと思っていたんだけれどね。

おじいさんの戦争体験はもう45・6年前の昭和12年の7月から昭和21年7月迄（終戦後約1ヵ年捕虜生活）足かけ十年にも及んでおり全部記述するとしたら数百ページにもなるかも知れないと思うけれど、ほんの1・2例書き述べてみよう。

おじいさんが召集令状を受けて千葉県津田沼にあった鉄道第二連隊に入隊したのは支那事変がはじまった間もない8月下旬だったかな。信一君のお母さんはまだ生後1年7ヵ月位の眼のつぶらな丸々太ってとても可愛らしい子供だったが、その頃出征兵士を送るために盛んに歌われた「勝ってくるぞと勇ましく誓って国を出たからにゃ手柄たてずに死なりょうか」なんて軍歌を歌って駅まで送ってくれた姿が今でも懐かしく思い出されるよ。当時の日本中の若い人達は誰かれとなく最愛の妻や子・親・兄弟と別れて戦場に赴くことは正直言うと断腸の思いだったんだよ。いくらお国のためと言ってもね。まして君たちのお母さんも父の居らない中にもおいおい成長してその安否を心配し、淋しい思いをしながら母達（おばあさん）と共に長い年月家の仕事を手伝ったり、お子守りをしたりして留守を守ってくれたんだよ。

そして、戦争も長期にわたり食料や物資が不足して白いご飯も食べられず、お芋・大根・麦などをまぜて飢えをしのぎ、つぎはぎだらけの着物を着て本当に不自由な生活を余儀なくされて、終戦後も10年ぐらいはそんな状態が続き惨めな思いをしたものだけれど、こ

れにも挫けることなく勉強も人一倍努力して人後におちず立派に成人してくれたんだよ。

おじいさんの部隊は戦闘部隊ではなく、鉄道の建設・運転・保線修理などをして前線に兵員・武器弾薬・食料などの輸送をする部隊任務を持つもので、敵と戦火を交えるのは敵のゲリラ作戦による受身の戦いで、駅勤務中とか破壊された鉄道橋・線路の復及作業中とか、列車運転中に敵襲・爆撃など受け、止むを得ずこれを撃退するために応戦するんだけれど、このような極めて危険な戦闘が繰り返された中をよくくぐりぬけて来られたものだと感無量だね。

中国の河北省の京漢線の官荘（石家荘市の南五十キロくらい）という小さな駅で６・７名くらいで勤務中、夜半敵襲を受け二人の戦死者をだしたけれど幸い歩兵部隊の救援を受け翌朝敵を撃退して駅を守り抜いたり、また山西省の超城駅の勤務中敵の夜襲を受けやはり夜明けまで打ち合い、敵を撃退したけれど、後でおじいさんの身の回りを見たら薬きょう（弾の抜けた殻）が何百発あったか数え切れないほどごろごろしていたね。

このときおじいさんは、敵の投げた手投弾が身辺に落下して、その爆発で顔も傷だらけ耳の鼓膜も破れて、野戦病院に収容されてだんだん後方に送られて、北京・天津と専門医の居る陸軍病院で治療を受ける破目になったんだよ。でも２ヶ月ほどで傷もなおり耳も大分聞こえるようになったので、また前線に居る部隊に帰されて前にも述べたような毎日を送ってきたんだよ。

ある時は晋南作戦という山西省の敵を南のほうに追いはらう戦いにはおじいさんは鉄道挺身隊の一員として鉄道施設（駅・機関車・車両等）の確保・占領などの任務を帯びて第一線の戦闘部隊とともに進んだとき、あまり前に進みすぎて敵に包囲され、味方の歩兵部隊の擁護を受け九死に一生を得たけれど、銃弾がヒュヒュ・ピシッビシッと身近に飛んでくるし、砲弾・手投弾はヒュルーン・ヒュルーン・ヒューン・ダーンと言い表しようのない不気味な音を立ててところかまわず着弾して炸裂するし、もうここが最後と本当に生きた気持ちがしなかったね。

このような目に何回となくあったけれど、よく命あったものだと今でも思い出してぞっとしておるよ。戦争は敵・味方おたがいが不幸なことで決してやってはならないことだし、これからの若い人たち、かわいい子や孫たちには絶対に兵隊にはしないようにしたいものだと思うね。

おじいさんたちは血なまぐさいことばかりでなく、中国・ビルマ・タイ・仏印（今のベトナム・カンボジア）などに進駐して任務についておったときは、現地の人たち、特に今言われる難民たちと仲良くして、鉄道の保線作業や復旧作業に協力してもらい、賃金や食料などを与えて保護し、また子供たちとは国に残してきた我が子達を偲びながら食料を分

け与えたり、歌・日本語を教えたり、現地のことばを教わったりして仲良くかわいがったものだよ。

現在イラン・イラク戦争は世界最大の産油国のことだし世界の経済に及ぼす影響は計り知れないし、ベトナム・カンボジア・ラオスなどでは内戦が続き何千何万の難民が他国に逃れだして、住むに家なく働くに職もなく、十分の食事もできず、世界中の人たちの保護を受けており、かわいそうなものだよ。

おじいさんは話下手で作文力が弱いので信ちゃんたちに十分納得がいくようにいかないけれど、また重ねて言うけれど、悲惨な戦争は決してやってはいけないと思うね。

今日本は、おじいさんの部隊と同じように戦争をしかけられていると言うような立場にあるように思われるけど、何とか平和解決を祈りたいね。

戦争の思い出話はもう嫌だよ。今度会った時はもっと明るい楽しい話を語りあいましょうよ。

八月盛夏

信州の祖父より

少年の目に灼きついた光景

高橋　健（湖北台在住）

私が物心がついた時は、もう中国との戦争の真只中であった。やがてアメリカとも戦争を始め、東南アジアの国々を次々と占領していった。軍国少年だった私は、占領地に日の丸を貼り付けて次はどこかと期待していた。

５年生になった時に、日本の敗北の始まりとなったガダルカナル島の戦闘劇を学芸会で演じた。敵陣に斬りこんで行く一兵士の役であった。「弾丸を送れ！１機でも多くの飛行機を！」と遥か日本にむかって叫ぶ隊長役の友の声が思い出される。悲壮感に満ちた、重々しい「海ゆかば」の歌を、朝礼の度に二部合唱をする学校のことであった。

担任は師範学校を出たばかりの熱血教師で、男子組の私達だけは、始業前に近くの不動様へ戦勝祈願の集団走行をした。十数年後教師となった私は、列車の中でかつてのその恩師と出会った。今は罪滅ぼしのために、教職員団体の役員をしていると私に語った。

父は鉄道員で、地方都市の駅務であったのと、両親の実家が農家であったことで、比較的食糧事情には恵まれていたが、それでも三人の男の子を養うことは大変なことであった。母は、よく農家の知り合いをつくっては、田植えや稲刈りを手伝い、着物を縫い上げたり

して食糧米を調達していた。夕方暗くなるまで働き、帰宅してもしばらく泥のように眠りこんでから夕食の仕度をする母の姿に心が痛んだ。今にして思えば、「白いご飯を腹いっぱい食べたい」という思いは、私の少年期から青年前期まで続くことになったのである。

無邪気におかわりと食器をさし出す二人の弟たちに、彼らには見えないようにそっと自分の分を削って与えている母の姿を見ていた兄の私は、その光景を思い出すと、今でも胸をしめつけられる思いがする。

衣類もなくなり、ノートも鉛筆も次第に少なくなって、旧制中学１年生の国防色と言われたカーキ色の弱い布地の服は、たちまち傷んでいった。まだ１年生は、上級生のように工場となった剣道場で働くようなことはなく、博物（今の生物）や物象（物理）や英語など新鮮さを感じながら勉強することが許されていた。しかし、中学２年になると、風雲急を告げ、九十九里米軍上陸に備える山腹の穴掘り作業に動員されることとなった。日向にある布田の薬師様に寝泊りすることになった。つらさよりも、授業をやめて親元を離れて集団生活をするということへの好奇心の方が強かったように思う。そして幸か不幸か、同じ穴掘り作業をする部隊の兵士たちと寝食を共にすることとなったのである。そこで見た軍隊生活の実態は、多感な 14 才の少年の私には衝撃的で決して消すことのできない光景のひとつとなった。それは父と同年代と見える兵卒が、遥かに年下である上官の命令にひれ伏すように従い、夜の点呼の席での罵倒や殴打を浴びてもなすがままに耐える姿であった。目撃している私たちは誰もが本能的に上官を憎むこととなった。時々、兵卒が土運びをする私たちに優しく声をかけた。「俺にもお前たちのような子どもがいるんだ」と、ふりしぼるような声でささやいたことも忘れることができない。学級で１番か２番目に小さかった私は、よく声をかけられた。その父親のような兵卒が、子どものような少年たちの目の前で殴られる光景は、言いようもなく悲しいものであった。

絶対服従という関係は、戦争を進めるために、私たちの生活の隅々にまで貫かれた。目上の者には文句など言ってはならない、ということは、目下の者は絶対に従わせるということでもあった。中学生の間でも、上級生の命令は絶対であり、理屈に合わないからと反抗することなどは全く許されないことであった。

鉄道員の官舎に住んでいた私は、駅構外で毎日のように行なわれる、今で言ういじめやリンチの光景を直接目にしていた。集団登下校は、列車通学の中学生の避けられない形態であった。リンチは、帰りの列車を待つ時間に行なわれた。上級生に導かれた下級生集団は、線路の引き込み線のある空地に集められた。理由にならない理由で、子羊のような下級生は次々と呼び出され、殴られ、中には倒れたまま、起き上がれない状態になる者も出た。

小心な私は、塀の節穴からその光景を見ておびえた。おびえながらあまりの悔しさに身を震わせた。

8月15日が来て、戦争は終った。9月からの新学期からの一日一日は、戦争に駆り立てた国の仕組みが、音をたてて崩れていく一日一日だった。先生も上級生も劇的に変わっていった。二度と戦争をしないと世界に誓う憲法が生まれた。戦争は人の命も奪うが、人の心をもゆがませ、人間らしい心を奪っていく。戦争の風は、絶対に吹かせてはならない。

昭和6年8月生れ。話の中心の日向（ひゅうが）は総武本線の駅。中学は佐原中学。小学校は成田小。昭和17年から20年の頃の話。

東京大空襲の体験を地震防災に

田中　　威（青山台在住）

戦後60周年を迎えた今年、戦中・戦後の苦境を経験した事実を少しでも後生の人々に残しておきたいと思い筆を執った。

戦中の体験として、一番鮮明に頭の中に残っているのは東京大空襲である。昭和20年（1945）2月頃、学童疎開から一時帰京して父・母・兄と4人で渋谷区内に住んでいた。この年の3月頃から首都東京に対する米軍の空襲が激しくなり、ほとんど毎週のように大～小の空襲に見舞われた。中でも3月10日、4月13日、5月25日の3回の空襲は熾烈で、多数の犠牲者を出し、首都東京の大半が焦土と化した。普通東京大空襲というとこの3回の大空襲を指すと思う。

3月の大空襲は、新型爆撃機B29の編隊334機による初の無差別絨毯爆撃で、東京都の区部（当時は35区）の東半分いわゆる下町地区が壊滅した。犠牲者の数も大正12年（1923）の関東大震災の時に匹敵するといわれている。

4月の大空襲もやはりB29の無差別爆撃によって東京の中央部、特に省線（現在のＪＲ）山手線の環状線内の被害がひどく、明治神宮もその時焼失した。

その直前の頃、1～2ヵ月後に徴兵を控えた兄が、茨城県内に住む姉を訪ねて丁度当日帰京の予定だった。今と違って電話で簡単に連絡がつくような状態ではない。電報も私用のものは駄目だったのだろう。3月の大空襲の時と同じように東の空が真赤に染まって行くのをただただ眺めて、兄が無事に帰ってくるのを待つのみだった。夜が明けて、居ても立ってもいられず、母と二人で探しに行くことにした。交通機関は全部ストップ、新宿駅か

ら出る私鉄の6つ先の駅に近い自宅から甲州街道を歩き新宿駅に出、山手線の外回り、池袋、上野方面に向って線路上を遮二無二歩いて行った。ボロの運動靴とゴツゴツした線路の敷石、とても歩きにくかったことを憶えている。

どこまで歩いたか記憶がないが、途中で動き出した電車を乗り継いで帰宅できた。兄はまだ帰ってきていなかった。2～3日経った日の夕方、兄がひょっこり玄関先に現われ、母が抱きついて無事を喜んでいた。聞く所によると、帰京予定日に東京空襲の予兆があったのか帰京をとりやめ姉の家にそのまま留っていたということである。無理に帰京していたら、北千住～上野、上野～池袋というような所で空襲に出会ったかも知れない。当時いずれもひどくやられ焦土と化した。

上記の3月、4月の大空襲で東京は甚大な被害を蒙ったが、自宅のあった渋谷区内までは大きな被害は及んでいなかった。前述のように東の空が真赤に染まり時折柱状の焔（ほのお）が見られたが、火の粉が飛んでくるようなことはなかった。さすがに東京は広いなあという感じだった。ところが5月の大空襲は、B29の編隊470機による東京に対する最後の大空襲で、残っていた東京の区部の西部の太半を焼失し、宮城（現在の皇居）も炎上した。

5月24日の夕刻より警戒警報のサイレンが鳴り始め、空襲警報が発令されると高射砲の音と共にB29の爆音も聞こえるようになってきた。たまにB29に高射砲の砲弾が当ったりすると、ベランダや屋根の上にのぼってみていた近隣の人達の中から歓声や拍手が起こった。そのうち、あちこちに焼夷弾の落下による火災が発生し、風も強くなってきて火の粉が飛んでくるようになった。「モロトフのパン篭」と呼ばれた焼夷弾は中空で爆発後、地上に火の雨を降らせるため、木造家屋の密集した市街地は一溜りもなかった。防空演習で精を出した手押しポンプやバケツリレーによる消火などは何もできなかった。隣組の防空団に徴用されていた父が戻ってきて、危なくなってきたから早く逃げるように叫んだ。貴重品（教科書・学用品など）を防空壕に放り込んで厳重に蓋をして母と二人で逃げることにした。走り出して間もなく用水路の橋のふもとに焼夷弾の束が落下し、大きな火柱と爆風が起きた。避難者は折り重なるようになって倒れた。火の勢いも激しくなり、灰まじりの雨が降ってきた。防空団からの指令などもう届かなくなり、とに角自分の判断で暗い方向に向って逃げることにした。ようやく今の代々木公園、当時の練兵場にたどりつき、自宅の方向を見ると赤い炎に包まれていた。まわりは手荷物を持った避難者であふれていた。夜が明け、焦土と化した自宅近くに戻ってみると、大きな袋をかついだ父がやってきてお互いの無事を喜びあった。袋の中味は乾燥芋で、被災直後は食糧の配給などままならず、応急の食料になった。

この５月の大空襲を最後に東京は大きな被害に見舞われていない。予想される東京大地震では東京大空襲や関東大震災のような木造家屋による大火災は予想しにくいが、非常事態に入った場合、的確な判断、行動が必要であろう。一寸した判断、行動の迷いで生死の境を分けた犠牲者の姿が今でも脳裏に焼き付いている。また、わずかな食料でも、ふだん持ち歩いている小物でも非常の場合思いもかけず役立つことがある。

父の戦死から６０年私と私の家族は！

田中　良兼（我孫子在住）

今年の春、95 歳でいつも元気だった近くの（柴崎）のお婆さんがお亡くなりになった。戦争未亡人で私が犬の散歩時にお話しするお婆さんだ！お顔が 10 年前に他界した私の母にそっくりなのと同じ戦争未亡人と言うことでより親しみを感じていた。会えばいつも長生きしてねと言っていたが、今は家の前を通る度に思い出されて寂しく思う。

戦後 60 年！私が 5 歳の時、赤紙（召集令状）を戴き沖縄戦で戦死した父、13 歳の兄を頭に 7 人の子供と妻と病気の母を残し昭和 20 年 4 月 15 日終戦直前（沖縄県本部町伊豆味）にて戦死した。「どうしても生きて帰りたい。帰らねばいけない家族がある」と戦友に激しくなる戦線の中で叫んでいた父だったが思いも空しく戦火に散り、残された家族には小さい白木の箱に骨一本送られて来た。

故　田中　二三太郎氏

私たち親子兄弟の苦難の日が始まったのは言うまでもない。敗戦、無条件降伏当時の新聞にアメリカ軍総司令官マッカサー元帥がパイプをくわえた写真があったのが記憶に残っている。戦争で失う物は失い何も残っていない日本。それは敗北者ではなくはい上がり者の開き直りそのものだったように思う。何もない生活、だが生きなければいけない。兄は優秀で上の学校に行くよう先生が何度も説得に来たが、現状が現状だけに親、病気の祖母、弟妹兄弟の為に自分が父の役目をしよう。幼い 13 歳の少年は意を決し働いたのである。

兄弟達が完全巣立ちする迄頑張ろう。父の意志を継ぎ、心を鬼にして頑張ったように思います。蛭に食われながらした田の草取り。薮蚊に刺されながらした畑仕事。小学校１年の弟と自転車で玉葱やナス、トマトの苗売りに行き生活費にしていました。

新聞配達は小学２年からしていました。高校卒業迄やり、生活の役に立てばと思いやり、就職しました。母とリヤカー引っ張り、牛に与える草を積んで夕暮れの道を歩いていると遠くに我が家が見えました。私が母に、障子は破け家の中が見える家を見て…ボロ家ね‥と言うと、「あそこん家は確かにボロだけれど中には笑顔が一杯有る暖かい家ばい…私ん家は日本一たい。皆な優しいいい子ばっかりたい…外はぼろでんよか」そんな会話が今は無き母との思い出につながっています。今から 15 年くらい前、仕事で沖縄に滞在したときの話ですが、休日の日、糸満市に有る平和記念公園に行きました。そして摩文仁ケ丘にある沖縄戦での全国戦死者慰霊塔に参拝しました。火の国の塔（熊本県）に行って戦没者の名前を懸命に探しました。横上の奥から３行目に父の名前（田中二三太郎）を見つけたとき、止めども無く頬に涙が流れ万感の思いがしました。お父さん、私も妻と子供（男 2、女 2）を持ち、幸福な家族を築きました。私の兄弟も 7 人皆元気で、貴方の孫 17 人それにひ孫も沢山います。貴方は大切な一人っ子で 7 人の子供を残し、後ろ髪引かれ、死ぬに死にきれない思いで戦火に散られましたが、天国からのお父さんの思いは今、私と兄弟そして大東亜戦争の全国戦争犠牲者 230 余万の英霊のご遺族又長崎・広島の原爆被災者、戦後の復興に努力された国民の頑張り、それは戦火に散り、明日の日本を心配して死んだ、多くの犠牲者（父も含め）の方々の切実な願いだったのです。帰りに牛島隊長の自決された場所が丘の下に有ると教えて戴きました。平和な日本　有り難うお父さん。その日ひめゆりの塔を回り、恩納村の万座ビーチ、残波岬から沈む夕日を眺めながら平和の喜びを噛みしめ右の頬で笑い左の頬で泣いていました。

沖縄（摩文仁ヶ丘）火の国の塔

沖縄の出張から帰り、東京での生活は毎年正月、お伊勢神宮の支宮、東京大神宮に参拝し妻と２人で、靖国神社へと参拝している。縁日ではないが、露店が並び昔懐かしいお菓子や甘酒等の店が所せましと並んでいる。私と妻はノモンハン事件等の遺品、戦争の回想に気持ちをかたむけ、父の慰霊はただ参拝するだけで、最大の目的の場所は母と子の像の前で当時を忍びただ泣くだけ！4 人の子供を抱え、東京暮らし。正月に誓う母と子の像それが靖国神社でした。

ひめゆりの塔

供に親として教えたのではなく言った事は、「自分の事は自分でしなさい。親に頼るな！人に甘えるな！日本人として誇りを持て！」大きくはこの３つでした。４人の子供の３人は結婚。一番下も近々です。孫も３人目が出来る予定です。

私は、縁あって 20 年間全国を回りました。勿論、ビジネスでなんですが、地方の色々な方と語り親しくなりました。そこで感じた印象は、他人も兄弟も同じでした。韓国の人も北の人も全く同じでした。東南アジア、中国、ロシア、いや世界の人も心からお付き合いすれば同じではないかなあーと感じました。線引きしているのは、している人の狭い心では？と感じるようになりました。真の民主主義を築く為にも、今は戦争の敵国アメリカと無条件降伏したジャパンが一体になり、世界の民主主義に立ち向かい、誤解されている日本の本当の真実を証し、堂々と民主的に解決して行ってほしい。戦死した父の願いを、又先祖代々の願いのためにも、日本の文化と日本人、そしてアメリカ、アジア、世界の相互理解と平和を願ってやみません。どこの国にも悪人善人はいます。セコい人間もいます。

しかし大局を眺めると世界の大きな流れなのではないでしょうか？

戦後 60 年、父の戦死を平和の糧として、我々一族は日本の国旗と民族を誇りに、益々平和推進に寄与出来ますよう頑張って行きたいものです。そう願っています。

昨日の敵は今日の友！今日の友は明日も友！全世界が一日も早くそうなりますようお祈りして･･・昨日の敵は今日は友。今日の敵は明日は友。友はいつまでも友！でありたい。

戦争体験記録
戦友は、私の手を握りながら死んだ

寺島　正蔵（日秀在住）

これ迄にも戦争についてのお話しは数多く聞いて来ました。広島・長崎の原爆、各地の空襲、疎開、大根めし、いもめし、イコール戦争であり、これに係わった者のみが英雄視され、原爆を語らずして戦争ではない如き印象さえ持つ。遥か外地の戦場で実戦に参加し若くして戦火に散った方、生死の境をさまよい九死に一生を得て恥をいとしながらも辛うじて帰って来て、ひっそりと余命を送って居る方々の悲惨な戦場の状況などは戦争のお話しの中には一切出てこないのは何故でしょうか。末代迄も語りつがれるとは裏腹に遠の昔に忘れ去られて居るからではないでしょうか。この様な人々にとっての戦争とは永久に忘れる事なく末代迄も語りつぐ事が果たして心安らぎ幸せを感じるものでしょうか。逆に早く永久に忘れ去る事で心も安らぎ幸せに余命を全う出来る事もあるのではないでしょうか。

私は大正11年生まれの83才。北支とパプアニューギニアの戦闘に参加。終戦2年後にニューギニアから帰国しました。

指定の字数では五年間の戦闘記録は到底書き切れるものでは有りませんが、ほんの一齣に過ぎませんが別紙にて記憶を辿って見たいと思います。

昭和17年現役軍人として入隊。約半年後、北支の第一線に派遣、戦闘に参加。21才の若さで生まれて初めての経験。厳しい訓練。顔が変形する様な仕打ちにもめげず、ひたすら生きるを目的に。夜を通しての銃声。夜の歩哨に手榴弾が重い。前夜の歩哨で先輩が敵の銃弾で重傷。過去にここから捕虜になった者も。益々戦闘は激しく土煙で顔が誰なのか分からない。ピューンと無気味な音をたて銃弾が頭上をかすめる。頭を下げろっと上官が怒鳴る声も銃声でとぎれ勝ち。前に後に着弾するたびに土煙であたりが見えない。隣の戦友が大丈夫かと怒鳴る声だけがかすかに聞こえる。雨あられとはこの事。弾の方で除けて行く様だ。しばし沈黙のあと一斉攻撃。戦場の様だとは。生きた心地はないが死を考える事はない。夢中とはこの事かも。何処からともなくうめき声が聞こえるが何の余裕もない。生まれて初めての恐怖。涙も出ない。其の時前が真暗になり夢中で引金を引く。続けざまに前方に着弾。土煙が上り前の戦友がウワーッとうめき声を上げ、倒れて動かない。思わず「どうしたしっかりしろ」と駆け寄り抱き抱える胸から血が流れ、「しっかりしろ頑張るんだ」怒鳴って見ても何か言おうとしているが聞きとれない。どうにか胸のポケットから取り出したのは1枚の写真。其れには奥さんらしい女の人が可愛い男の赤ちゃんを抱いて写って居る。

其れを僕の手にしっかり握りしめ何かうなづくばかり。とじた儘（まま）の眼には涙が一杯。声にはならないが僕の手をしっかり握りしめた儘、息を引きとる。どんなに無念だった事か。降る様に飛んでくる弾でも当るのは稀なのに運が悪いとしか言い様がない。明日をも知れない命。確かめ合う顔には言葉はない。次は俺の番かと覚悟は出来て居てもやはり怖い。戦場には明日と言う日はない。

連日の激戦の中、突然移動命令。上海より乗船。其れは輸送船だった。十数隻の船団で新しい服が支給、夏服だった。やっぱり南方だと直感。途中1隻は撃沈、全員海の底へと。乗船して1ヶ月、着いた所はパプアニューギニア、上陸した所はジャングルに覆れた砂浜。其の夜は其処でゴロ寝、夜中に腹の上をヤドカリが動き回る。皆んな無口である。このあと地獄の様な悲劇と恐怖が待ち受けて居るとは。

北支とは違い、銃を打ち合う戦争ではない。凡（すべ）て飛行機の戦争であり、私達には手も足も出ない。連日、空を見上げ逃げ回る。毎日、煙を出せば即、爆撃。白いものは干す事は出来ない。連日の移動で食糧は遠うに底をつき、身に着けるものはたとえ食糧で

あっても重いものは捨て行く悲しさ。物を持って歩く体力も気力もない。追い着いて行かなければ死を待つのみ。連日の極暑にスコールが待ち遠しい。休憩が有れば休む暇など無い。あたりを駆け回り、手当り次第、カエル、ヘビ、トカゲ、雑草、木の皮と捕りあさる。捕らなければ死を意味する。水筒に残してある海水が唯一の味付け。ネズミは手、足の指と口ヒゲを切り取り皮をむき丸ごと。こんな美味しいものが有るとは。生きて行くにも儘ならない。極暑故の恵みもある。雑草も豊富。だが其れも束の間、忽ち食べ尽くされる。長居は禁物。灼熱地獄の中、肩をかす体力もなく其の儘置きざりに見捨てて行く辛さ。各自の腰にネズミ、トカゲがぶらさがって居るのが今も印象に残っている。

途中見付けた水溜りに一斉にむらがり舐める様にむさぼる。野宿の果てに待つのはマラリア。これは必ず死を待つ事に。手を貸せる者は居ない。其の儘置き去りは罪なのか。小川が有れば一斉に駆け出す不思議な力は何処に有るのか。其の小川の水辺に水を飲み頭を突込み其の儘、息絶える者数知れず。愈々次は俺の番かと思うのは何回目でしょうか。高熱で水が欲しいと、とじた眼に涙一杯。其れを見守る者がより欲しい苦しさ。自分だけは生きたい。これは罪でしょうか。友の一人が見かねて水筒の残り海水を与えると、かすかに笑みが見える。明日は声を聞く事はない。辛い、悲しい、を越して残酷と罪悪にほかならない。先輩許してと置き去りに、うしろ髪引かれる思いで出発。友の肩を抱え乍らのちどり足。これで南方からの遺骨は何も入って居ないのが納得出来るのでは。

其れから他へ配属になり、戦闘は益々激化、連日の爆撃とマラリアで死亡者続出。親友の先輩もマラリアで先はない。今日は少し栄養をと思い、彼の為にネズミをと駆け回る。通じたのか1匹捕れ、早速残してある海水で雑草を入れて。何時も君には済まないねと手を握る、眼には涙が。明日は別れかと本人も気が付いて居る様だ。今晩は一緒に居て呉れと疲れた様子、言葉は少いが僕の手をしっかり握りしめ、朝は冷たくなって居た。ここでは手の親指だけを切り取り火葬して一寸角の箱に納める。これ迄何人の指を切り取り火葬したことか。骨箱も幾つ作ったことか。

内地では大根めし、イモめしとめしが入って居た様だが戦地ではネズミめし、いやめし抜きのカエル、トカゲ、雑草の雑水、いや海水煮と言うのか。これを拒めば即、死である。朝起きれば必ず何人かは冷たくなって居る。2年間は、米は見た事が無い日本人がここにも居ました。幸か不幸か終戦2年後に帰国したが何か恥じるものが頭をよぎる。終戦と言う二文字で命は救われた思いもするが何か空しい。これが五年間の一齣である。

「いくさ」はいやです。

としま　さだこ（天王台在住）

敗戦のとき、私は14才でした。満州事変の起きた年（昭和6年）に生まれ、日中戦争の始まった昭和12年に小学校入学、太平洋戦争突入は、小学校4年生のとき、というように、15年戦争と共に育った私です。

だからと言って、ずっと悲惨な暮らしだった訳ではありません。戦争というものを実感したのは、大東亜戦争になってからでした。それまでの子ども時代は、戦争は兵隊さんが外地へ行って連戦連勝しているものと思いこみ、内地の子ども達は学校から帰ると、原っぱで存分に遊び廻っていたものでした。けれども義務教育の中にも、しっかりと軍国主義思想は入りこんでいて、昭和15年（紀元二千六百年）には提灯行列が盛大に行われましたし、毎月初めの氏神様参りも、学校行事として全校生徒で行きました。図画の時間には、南方の椰子の木の絵や紀元二千六百年祝賀の絵などを描かされました。

♪　金鵄輝く日本の　栄えある光身に享けて
　今こそ祝えこの朝　紀元は二千六百年
　あゝ一億の血は燃ゆる　♪

♪　肩を並べて兄さんと　今日も学校へ行けるのは
　兵隊さんのおかげです
　お国の為に　お国のために戦った
　兵隊さんよ　ありがとう　♪

柔軟なこどもの頭に覚えこんだ歌は、今でもしっかりと歌えます。

昭和17年の4月18日、東京に初めての空襲がありました。学校から帰宅して玄関に入ろうとした私の頭上を、星のマークの飛行機が低く飛んで行きました。「ただいま」と家の中へ入った途端、バリバリという音がして天井から砂埃が落ちてきました。あとで分かったことですが、アメリカの爆撃機が1機、当時住んでいた品川区の工場に爆弾を1個落としていったのでした。警報は何もありませんでした。初めての驚きも周囲がさほど騒ぐこともなく次第に忘れて行き、太平洋戦争最初のころは赫々（かっかく）たる戦果という報道で、昭南島（シンガポール）陥落の時はゴムまりの配給がありました。私の周囲が次第に変化していったのを、子ども心に感じたのは、お菓子屋さんを始め商店が軒並み閉められていって、街に活気がなくなっていったことです。同時に若い男の人は居なくなり、残っているのは　年寄りと女、子どもばかりでした。

昭和18年、女学校入学、まだまだ乙女の夢はありました。音楽練習室で毎朝ピアノを

練習する上級生に憧れたり、学級図書のシェークスピアの戯曲を読むクラスメートに尊敬と驚きを覚えたり、英語の授業は、二世のミセス野崎が先ず会話から教えて下さったりと、新鮮な感動がたくさんありました。

でも長続きはしませんでした。何時のまにやら、ミセス野崎の姿は、学校から消え、担任の男性教師も召集されました。

昭和 19 年の秋、兄の転勤に伴い、滋賀県の大津に移ることになりました。その直後から、東京の本格的な空襲ははじまりました。

転入学した県立女学校は「農業」という時間があり、学校裏の茶臼山へ、松の根を掘りに鍬を担いで行きました。松根油といって飛行機の燃料にする油をとる為です。

夏休みには、陸軍の兵舎へお掃除に行き、南京虫をうちへ連れ帰りその夜は家中大騒ぎ。

昭和 20 年　殆んど毎晩のように警戒警報が鳴りました。サイパン島を飛び立ったアメリカ機が潮岬から入り湖面の光る琵琶湖の上を通り富士山を目指し東京に向うという飛行経路上にあるからだということでした。

8 月 6 日朝、夏休み中の登校日、快晴でした。8 時 15 分ごろ、急に空が暗くなり太陽が鈍いオレンジ色に光って見えました。友人が「何やろ、天変地異みたいやね」と言ったのを覚えています。広島と大津 400 キロ近くも離れているのに、と思いますが、偏西風に流されてきた原爆の雲だったと思います。

やがて敗戦の詔書が天皇陛下のお声で読まれ、ガアガア雑音の中から戦争が終ったということだけは判りました。何の涙だったのか涙が出たのも記憶しています。兎も角、目の前が明るくなりました。もう電灯の黒い覆いも取っていいのだから。

その後のたべものの乏しさ、しょっ中停電する不自由さ、戦災孤児のこと、ヤミ市等々いくさのあとの、さまざまなつけは、測りしれないものでした。

私の次兄は飛行学校教官をしていましたが、応召してシベリアに抑留され、昭和２２年病死しました。22 才の若さでした。母は逝くなるまで、飛行機の音が大嫌いでした。

戦争に大義などない、というのが私の信条です。弱い者、力の無い者が先ず被害を蒙るのが「いくさ」だと思います。いろんな国のいろんな人々を知って、それを受けとめて仲良くしていけるのは、ふつうの人々なのかも知れません。

太平洋戦争も、私の年代でも受け止め方は、さまざまでしょう。でも、親を失くすこどもが出来るような「いくさ」は絶対にしてはいけないと思うのです。

平和を祈りて

並木　公子（湖北台在住）

昭和九年（満州国建国の年）、私は旧満州大石橋で生まれました。

父は大正 12 年から満鉄の小学校に勤め、大石橋、安東（あんとう）、奉天で校長職を経た後、新京の日本大使館教務部で働いて居りました。昭和 14 年全満州の校長級の大移動の際、過労の為、急死いたします。

安東にて

母は女学校の舎監の仕事を得て、八人の子と共に大連に移り、2年後に戦争が始まりました。

昭和16年12月8日、「大変だ、大変だ。戦争が始った！」と先生が叫びながら教室に入って来ました。1年生の教科書が「サイタサイタサクラガサイタ」から「ススメススメヘイタイススメ」に、「ドレミフア」が「ハニホヘト」に変わりました。学校では教育勅語の暗記、軍人勅諭の暗唱、モールス信号、手旗信号、ほふく練習、竹槍、銃剣術、夜間行軍等が始ります。敗戦近くなると、防空頭巾にモンペ姿、上衣には血液型を記入した名札をつけ、救急看護の特訓が始ります。手榴弾で自決の方法まで習いました。

新京にて

配給券による食糧事情が悪化する中でも、戦地には慰問袋を定期的に送り、激励の手紙を必ず添えました。新たに召集令状が来た人には、晒（さらし）の腹巻に千人針を刺し、日の丸の旗に「必勝」と書いて送り出します。大連一中で語学の教師をしていた義兄にも敗戦直前に赤紙が来て、シベリアに出征し、そのままソ連領ブラゴェシチェンクスで無念の死を遂げました。親しかった知人も散って行きました。

東京の大空襲、沖縄の玉砕、広島、長崎の原爆のニュースが次々に報じられ、遂に昭和20年8月15日、敗戦を迎えます。満州在住の邦人195万人にとってそれからが戦争でした。

不可侵条約を破ったソ連軍は、日本軍が武装を解除した後に侵入してきたので、開拓団の自決など痛ましい死者は八万にも及び、合わせて16万4千の尊い命が失われたとの事

です。（『ああ、満州』農林出版㈱）命からがら逃げて来た人もあり、我が家も行き場のない数家族で一杯になります。学校も中国人の学校と交換、道を歩くと石を投げられます。夜は中国人の暴動が激しいので、雑嚢をしょって、靴をはいたまま、寝る毎日でした。昼間にはソ連兵の訪問があり、「ダワイ、ダワイ」と腕時計と女性を欲しがります。女性の多くは坊主頭になり、夫々（それぞれ）の家では秘密の逃げ口を作りました。奥地の女性の犠牲については、記憶を基にした本を読むだけでも苦痛です。（『満州安寧飯店』光人社）

その後、ソ連人に家を接収され、小さなアパートに引越しました。食事はかんころ餅、ビンズ、こうりやんなど、虫のついた乾パン12ケが一食分ともなり、本国帰還を待つ1年半は命の不安と生活苦の連続でした。母の苦労は書ききれません。

私たちも小学生に至るまで、ロシア人の経営する漁網工廠に雇用され、必死に働きました。ソ連の軍票でもらう報酬でやっと生き延びます。

昭和21年の秋、ロシア、中国、大連日本労働組合の話し合いで11月から約半年間、月に2万6千から5万人を輸送することが決まりました。親しかった隣の中国人は保存食を沢山持って別れに来てくれました。心和む思い出です。12月末大連埠頭に収容され、22年元旦に出航します。弥彦丸と云う貨物船に六千人が乗り、魚のようにびっしり並んで寝かされました。太人三人は座ったまま眠ります。リュックも靴も手造り、荷物の制限も厳しく、父の遺品は洋服に縫込みました。

嬉しかったのは、「メシアゲー」の声と共にバケツで配られる一杯のサバ入りの雑炊でした。本当においしかった。「誰か故郷を思わざる」を歌って励まし合った思い出と共に、船の中の出来事は60年経った今も鮮明です。

- 北満から歩いて来た開拓団の青年二人が疲労と栄養失調で力尽きて死亡。毛布にくるみ、ミカンを2ケ添えて水葬です。スクリューにからまない様に船は大きく1回転しました。
- 3，4歳の男の子と乳飲み子を抱えた元中尉の上品な奥さん。母乳が出ず雑炊をのりの様にしてなめさせ様とするがその力もない。隣で母が励ましても声もなく、ただ悲しげに赤児を抱くのみ。帰国後、赤ちやんの死亡の報せが届きました。
- 夜中に、元の部下に再会した上官がリンチを受けたとの事。顔が変形し、紫色にはれ上がった人が目の前に座っているので、息をのむ。
- 足の怪我が悪化し、ひざ下ふくらはぎが蛆虫で一杯。船医も患者も無言。ピンセットでつまみ出す虫はいつまでもきりがない。
- 姉が出征した夫の為に、帰国したら着せ様と大事に持ってきた背広を着ている人がいる！空になった小さな行李が海に浮かんでいた。その他、持ち物の検査を恐れて

船から跳び込んだ人もあり、食糧を盗んだと責められる人もあり、伝染病発生の為、1カ月以上佐世保に留められている間に亡くなった御老人もありました。

2月10日、やっと本土に上陸。東京までの車窓からの景色は一面焼け野原。これが祖国かと唖然とします。兄が東大在学中で、在外父兄救出学生同盟に参画していたので、心強く、宿泊その他をまかせました。兄は家族の半分は死んでいると思っていたそうで、「ご苦労様」とメガホンで迎える目は潤んでいました。上野の浄明院から目黒の雅叙園へ移され集団生活が始ります。やがて江東区の焼けた小学校の廃墟を区切って、アパートの様に改造した処が住まいとなりました。江東区の焼け跡はすさまじく、数年後のキティ台風の時、地下で亡くなった人々の頭蓋骨がいくつも浮いてきたので、改めて慰霊祭を行っていました。

この頃、四歳の姪が栄養失調と結核で亡くなり、戦病死した父親の後を追う様に短かすぎる一生を終えます。悲しみを抱えたまま、新制中学三年を終わりました。母の愛と、兄、姉たちの協力、戦後の試練を共に乗り切ろうとする人々の熱意で支えられた気がします。

やがて、中野の都営住宅に落ち着き、母の還暦を皆で祝うことができました。

私も我孫子に住まいを移して、30年余になります。この度、戦後60年を回想する機会を得て、記憶とは何と癒しがたい痛み、悲しみを伴うものであるかを知りました。近隣諸国の方々の涙を改めて深く思います。再びもと来た道を決して繰り返してはならないと、切に平和を祈ります。

「戦争は最大の悪事である。故に他国の戦争を廃する事を待たずして、自らの剣を鞘に収めずして、他に兵器の破壊を要求するも効果なきは明白である。戦争は相談の結果、廃止する事あたわず、先ず自ら一人これを廃すべきである。」（内村鑑三の言葉より）

「戦争の記憶」は「平和の希求」に

濱田　洋子（つくし野在住）

戦後60周年・被爆60周年の広島原爆忌「平和記念式典」のテレビ中継を、私はこれまでにも増した感慨をもって凝視した。我孫子市戦後60周年記念平和事業19事業の一つ『市内中学生の広島市平和記念式典への派遣』で、我孫子市で初めて6名の中学生が参加しているからだ。そして広島は、私の第二の故郷でもある。1936（昭和 11）年に広島市二葉の里で生れ、1938年父の転勤で中国北京へ渡り、敗戦で引揚げ帰国の後、被爆後3年目、原爆の惨劇が残る広島で暮らすことになった。小学校6年生だった。広島の復興は戦後日

本の国土復興であり、国民ひとりひとりの生活の立直しでもあった。広島の復興が私の青春だった。夫の転勤で広島を離れてからは、広島・長崎の「平和記念式典」のテレビ中継を必ず視て、黙祷をしてきた。我孫子で式典中継と向かい合うのは、今年で 32 回目である。

今年の秋葉広島市長の平和宣言は、「継承と目覚め、決意の刻」と呼びかけ、核兵器廃絶と世界平和実現のため、ひたすら努力し続けた被爆者の志を受け継ぎ、高齢化していく被爆者にかわって被爆体験を語り継ぐ責任に目覚め、核の恐ろしさを訴え核兵器廃絶への行動に移す決意をする刻と訴えている。そして碑文『安らかに眠ってください　過ちは繰返しませぬから』で結ばれた。そして私は、こども代表が『平和への誓い』で引用した、前ローマ法王ヨハネ・パウロ二世の言葉に感銘した。我孫子市で 8 月 20 日に行われた平和記念式典で、広島市平和記念式典に参加した中学生の感想が述べられ、こども代表が引用した言葉に感動したといわれたことをうれしく思った。中学生たちが広島で、戦争とは平和とは何かを考え学んだことは、これから私たち世代の戦争体験から発信する平和の願いを継承してくれると信じたい。だから、残された時が少なくなった戦争体験者は、戦争の愚かさを語り継ぐ責任がある。前ローマ法王ヨハネ・パウロ二世が 1981 年 2 月に原爆慰霊碑前で世界に発信したメッセージの中から、こども代表が引用した言葉は次の部分である。『戦争は、人間の仕業です。戦争は、人間の生命を奪います。戦争は、死そのものです。過去を振り返ることは、将来に対する責任を担うことです。広島を考えることは、核戦争を拒否することです。広島を考えることは、平和に対して責任をとることです』こども代表『平和への誓い』は大人への警鐘でもある。

ひとりひとりの人生・人権を無視するのが、戦争である。

1938（昭和 13）年、私たち家族は学業途中の兄を内地に残し、中国北京へ渡った。前年 1937 年 7 月に北京郊外で盧溝橋事件が起こり、日中戦争が始まっていた。父の赴任した華北電信電話株式会社は、軍部にとっても重要な事業だっただろう。1939 年学業終了と共に、兄は家族のいる北京にきて華北交通株式会社に就職した。1941 年 12 月 8 日ハワイ真珠湾奇襲で太平洋戦争勃発、戦局も厳しくなった 1943（昭和 18）年 9 月、兄は母の郷里山口県萩で結婚式をあげ、20 歳になるかならない花嫁を伴い無事北京へ帰ってきた。父の任務の関係か、戦局の危険な情勢のためか、家族は渡航しなかった。それにしても義姉はよくも北京まで来たものである。しかし新婚生活は 4 か月で終わった。翌 1944 年 1 月末に、兄に召集令状（赤紙）がきた。兄は徴兵検査は乙種合格であったので、自分に赤紙がきたことでこの戦争の敗色を察知していたようだ。兄は 2 月 11 日（紀元節）、粉雪の降りしきる北京駅から、母と新妻が短期間に走り回って完成した「千人針」を身に巻いて、

ひっそりと家族だけの見送りで出征していった。これが最後に見た兄の姿だった。出征する朝、偶然兄と二人だけになった時、兄は突然幼い妹の私を抱き締め、「お父さん、お母さんを頼むよ」と告げた。兄はその年の11月12日、河南省確山の野戦病院で戦病死した。小さな遺骨の箱と共に遺留品が戻ってきた。慰問袋で送った数枚の家族の写真の中で新妻の写真が一番しわくちゃで色褪せている。子どものいなかった義姉は遺言に従い、母の親戚で復員してきた人と再婚し、戦後を生き抜いてきた。私は戦後、一人息子を亡くして苦労している両親を見ながら、自分が成人するまで毎日、兄の位牌に「お兄ちゃんの残された寿命を、お父さんお母さんに分けてあげて、長生きさせてください」と祈った。都合のいい妹だ。

60年前の何千万の人間の死を忘れてはならない。自衛の名のもとで戦争を肯定してはならない。日本は戦後60年、数々の問題を含みながらも平和憲法を理念に、戦争のない国として成長してきた。しかし地球のあちこちで紛争や戦争が絶えることなく、核兵器廃絶に向かっての話合いどころか、核兵器保有を望む国さえあるのが現実である。未来を担う若人にお願いしたい。戦争という過ちを繰り返さないために、近現代史をしっかり学んでください。そして日本から世界に向かって『平和』を発信し続けてください。

戦争を許さないために

平林　健次（湖北台在住）

北海道に生まれ育ち、11年前に76歳で亡くなった父は、昭和6年9月に日本の関東軍が仕掛けた満州事変に始まる先の15年戦争のとき、二度戦地に赴きました。

一度目は祖母が急逝した年、父21歳の昭和13年12月、現役の初年兵として北海道旭川市に司令部を置いていた七師団・歩兵二十七連隊に入営し、直ちに日本が中国の領土を侵して造った「満州」の嫩江（のんこう）に派遣されてそこから、翌14年にモンゴル国との国境に近いハルハ河畔で引き起こされたノモンハン事件に派兵されて実戦に参加しました。

「事件」と称してはいましたがこの戦いは実は、モンゴル国の人々が言うように大きな戦争でした。それも父たちに厳しい箝口令が布かれたほどの負け戦でした。父が所属した二十七連隊は、1,690名動員されて戦死211名、戦傷死8名、戦傷184名、戦病27名でしたが、隣連隊の二十六連隊は1720名動員で戦死598名、戦傷死27名、戦傷756名、戦病191名、二十八連隊も1770名動員で戦死568名、戦傷死19名、戦傷656名、戦病

46名と、父たち生還者が「死に残り」と自嘲していたことが充分に頷ける惨憺（さんたん）極まる敗戦でした。

頑丈強力な戦車など圧倒的な火力を用いてノモンハンの草原を進撃してくるソ連軍の前に、旧式の武器しか持たない父たち一兵卒を必死の地に曝したのは、戦場から600キロも離れた「満州国首都・新京」にいて作戦を指揮した関東軍の参謀たちでした。彼らは時に酒気を帯びて会議に臨んでいたと指摘する作家もいます。何ということでしょうか。

父の二度目の出兵は、昭和19年3月、父27歳の時でした。ノモンハンから「死に残って」還った父は、次の召集が遅れることを願ったのだと思います。室蘭市の軍需工場に勤めながら、日本軍の真珠湾奇襲に始まった太平洋戦争開始の翌昭和17年春、母と所帯を持ちました。夜を徹しての突貫作業が続く工場から真夜中に召集令状を持ち帰った父は、「とうとう来たよ…」と母に呟いたそうです。子煩悩だった父にはこの時、1歳になったばかりの兄・俊夫がいましたし、母の胎内には5ケ月目になる私が宿っていました。入営したその日に部隊編成された父は、海上機動第四旅団・第三大隊の一員となって5月、米潜水艦の魚雷ひしめく根室港を出帆し、300キロほどの海路を11日も費やして択捉島に渡ります。近くの海で2ケ月前の3月には3千名もの将兵を満載した輸送船・日蓮丸が40余名の生存者を遺しただけで撃沈され、その日蓮丸を護衛していた駆逐艦・白雲は乗っていた270名全員が海に消えていましたから、父が生きて択捉島に渡ることが出来たことはノモンハンから死に残ったことと同様に本当に奇跡だったと思います。

父は1年後の翌20年5月に「内地移駐ノタメ」根室港に戻り、そこで家族と面会もできる短い休暇が得られるはずだったのですが、一人の兵が脱走したそうです。その捜索のために休暇が無くなり、間もなく1歳になろうとする私との初対面も叶わなかったのですが、父がどんな思いで戦友を捜し回ったのかを思うと言葉に詰まります。

人一人が在るためには父母二人が必ず要ります。その父母二人にもそれぞれ父母二人、合わせて四人が要ります。こうして数えて例えば今の一人を30世代さかのぼると実に10億を超える人々が関わります。しかもその一人ひとりが他の存在と絶対に代わることができない唯一無二の尊い命の持ち主です。

先の戦争で日本は300万を超える人命を喪いました。朝鮮、中国をはじめアジア各地に軍隊を送って殺し奪い、傷つけた命の数も計り知れません。これらの膨大な命の中には戦争の原因になど全く関わりのない乳飲み子を含む子どもたちもたくさんいます。遠い祖先から繋がってもたらされ、次に繋がるはずの何とたくさんの命を奪い、喪ったことでしょう。老いても幼くても、こんなにも輝く掛け替えのない命を、無慈悲に、無惨に踏みにじる戦争を私は心の底から承知しません。

国や地域に生きる私達を、安定した生活に導く立場と力を与えられた人たちは、その導く先が戦争の方向なのか平和の方向なのかの正確な判断を金輪際誤ってはいけないことを、15年戦争の経過と結果が厳密に教えていると私は思います。その判断を誤らないために、そうしたリーダーを志す人は、立場や力を持たない人々の声なき声や切実な思いに耳を傾け心を寄せる真に謙虚な姿勢を持つことが必要です。そして、人々の思いをたっぷり充分に上回る優しさと思いやりの心をこそ育て持ってほしいと願います。リーダーを選ぶ私たちもまた、それをも上回る意欲を以て自身の判断力を鍛えることが大切だと思います。

爆撃機（B29）による空襲と焼夷弾事故

本田　　弘（布佐平和台在住）

当時、私は小学4年生で、愛知県岡崎市に住んでいた。昭和20年7月19日の晩、東海地方は空襲警報が発令されたが、B29の一団が北陸の福井に向かい、警報は一旦解除された。その後、私は福井空襲の様子をラジオでずっと聞いていた。空襲が終わり、B29も全て福井から退去したので、ラジオを切って寝ようかと思いつつ時計を見た。針は11時20分を指していたように記憶しているが、その矢先にラジオが突然妙なことを放送した。「ただ今、福井を空襲したB29一機がはぐれて、岡崎の上空を遠州灘に向けて遁走中」と。岡崎と福井とはかなり離れており、「おかしな飛行機もいるものだ」と思っていると、程なくB29特有の「ウォーン、ウォーン」という爆音が聞こえてきた。爆音から判断すると、いつもよりもはるかに低い高度で、岡崎の東方を南下していた。その直後、東の方角で、突然青白い閃光が放射状に走った。

それからやや間があったが、B29約80機（翌日の新聞報道）による、岡崎の本格的な空襲が始まった。最初の一機を福井空襲のものと間違えただけでなく、敵機が続々と本土上空に達しているのに、焼夷弾を落とすまでその存在を探知することができなかった。

我々兄弟3人は、家の近くにある、工場に用水を送るためのポンプ小屋に避難した。空襲は次第に激しくなり、焼夷弾のヒュル、ヒュル、ヒュルという風を切って落下する音、ドドーンという炸裂する音、更にはザザザザーという何かを撒き散らすような音が、絶えず聞こえてきた。外の様子はポンプ小屋の天窓からしか伺えなかったが、赤く染まった空、点々と舞う火の粉、また外から聞こえてくる大小さまざまな音や激しい地響きの様子から、我々のいる直ぐ近くまでが相当被害を受けているような感じがした。

B29ははるか上空から、焼夷弾をばら撒いたものと思っていたが、夜が明けて空襲の状況を見ると、はっきりと目標物を狙って攻撃していることが分かった。我々の住んでいる一帯は農工業地域であった。その中で、田圃の中の一軒家である私達の小学校はものの見事に焼けてしまったが、周辺の田圃には無駄な焼夷弾はほとんど落とされていなかった。また、工場のすぐ裏の山には沢山の不発弾が落ちていたが、外れはしたものの、明らかに工場を狙ったものと考えられた。我々の社宅では一軒置いた東隣の家の便所に、大型焼夷弾が１発落ちた。幸い大事に至る前に、警戒に当っていた私の父らが必死に消火作業に努め、火災を喰い止めた。別の地域の社宅では、半数くらいが焼けてしまった。

それから１か月足らずで終戦となった。しかし、空襲で落とされた不発の焼夷弾は放置されたままであった。

10月17日は神嘗祭（かんなめさい）で学校は休みであった。その日、先輩に誘われて、不発弾が落ちている工場の裏山に出掛けた。そこで、何本かの六角筒型小型焼夷弾からガーゼに包まれた油脂を燃料用として回収した。さらに、手つかずの焼夷弾を１本持ち帰り、家で分解して油脂を抜き取った。空になった焼夷弾は、社宅の前にある畑地に捨てた。

近くで遊んでいた私の弟ら４人の子供がそれを見ていて、私が家に戻った直後に捨てられたこの焼夷弾を拾い上げてきた。そして、社宅の前の道路で「こんちくしょう」とか言いながら、焼夷弾を地面に２回、３回と投げつけた。何回目かの時、突然焼夷弾がポーンという音と共に発火した。辺りは、焼夷弾特有の油脂の匂いが漂う中を、衣服に着火した子供たちが泣き叫びながら逃げ惑うという修羅場と化した。全身火だるまとなって走っている女の子（４歳）を、近くを通りかかった大人がだき抱えて防火用水の中に浸けた。私の弟（８歳）は父が外から引き連れて来て我が家の池の中に入れた。また、下の弟（３歳）は半ズボンの裾に火が着いて逃げ惑っているところを私が捕まえ、素手で必死にもみ消した。しかし、女の子は火傷がひどく、次の日の朝、「アッ落ちる、落ちる」とうわ言を言いながら息絶えたとのことであった。一方、私の弟は１人が重傷を、もう１人が軽傷を負い、二人とも病院に入院した。

当時、このような事故は決して珍しいものではなく、新聞には載らなかったものの、現在なら当然記事になったような事件である。それにしても、発火用の角砂糖型黒色火薬２個とガーゼから漏れて筒内に付着したわずかな油脂がこれだけの威力を示すとは、誰が想像できたであろうか。

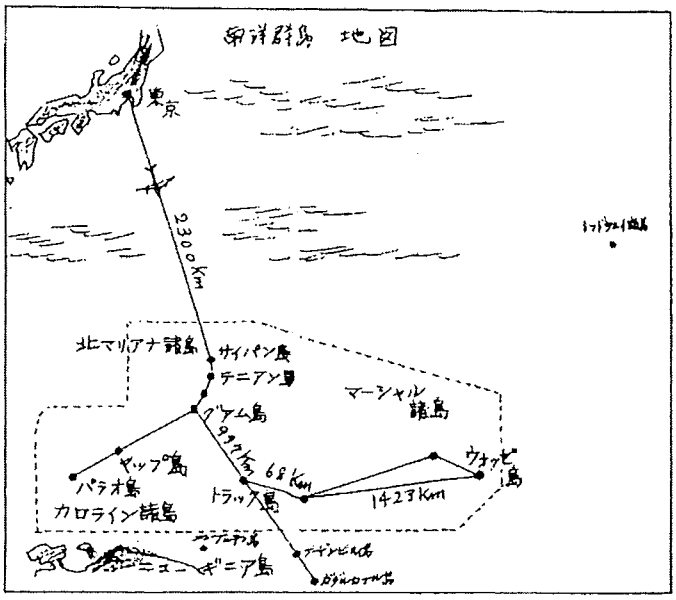
前線基地トラック島にて

松原　　勝（並木在住）

私は1942年（昭17年）から44年まで、第四海軍施設部の軍属として連合艦隊基地のトラック島（夏島）へ派遣された。

日本から3,500 kmの南海に点在するこの群島は、日本の委任統治領であり軍事的拠点であった。艦隊も陸軍部隊もここから出撃していった。開戦早々一帯の主な島々に飛行場建設をはかり守備隊を配置していった。

〈資料〉



トラック島は兵站（へいたん）を兼ね、施設部などの支援部隊のほか海軍病院もあり、陸軍部隊も出撃に備え駐留していた。婦女子を含む内地からの居留者や、流刑囚、強制連行された朝鮮人軍夫、慰安婦そして先住民がいた。こうした無辜（むこ）の人たちも戦禍に巻きこまれた。

1943年1月下旬、トラック島の桟橋はガダルカナル島から救出された兵士で溢れた。ほとんどが餓死寸前の傷病兵で、海軍病院への搬送が滞り炎天下に放置されていた。私たちは担架で木陰へ運びつづけた。

＜昭和１９年・トラック島大空襲の夏島（１万屯タンク付近）＞

42年8月から43年1月にかけてのガダルカナル島の激戦では、無謀な兵力の投入を重ねた日本軍は撤収を余儀なくされた。しかし救出は1万人にとどまり、「残された兵士は、戦火に斃（たお）れた者5千、あとの1万5千人はトカゲ、ミミズまで食べつくす無惨な最期（藤原彰著『餓死した英霊たち』）」とある。

この頃からトラック島と離島を結ぶ輸送船が次つぎ撃沈されて、守備隊は次第に孤立化の様相を深めていった。43年11月から44年11月までの1年間に9島10万人が

玉砕した。激しい戦闘のなかで生き延びた者には飢餓が待っていたのである。

1944年2月17、18日、延1,250機を投入してのアメリカ軍の攻撃は熾烈を極めた。この1週間前に突如、連合艦隊はポナペへ退避してしまい残された兵力は無力に等しかった。轟音をあげ黒煙を吹く燃料タンク、火柱をあげ撃沈される艦艇、逃げまどう輸送船、1,200人のうち600人の帰国婦女子を乗せた赤城丸は無惨に沈んだ。救助されたのは五十数名に過ぎなかった。迎撃に飛びたった若い飛行兵は、はなばなしい空中戦を展開したが70機全機撃墜された。低空による機銃掃射による恐怖、爆撃で椰子の木も吹き飛び、若い兵士が片腕をとばされた。苦悶の末の「おかあさん」の声が痛ましく残った。

冬島西方海上でアメリカ空軍の攻撃を受ける天城山丸。上方の黒煙は夏島の1万tタンク炎上の煙りか？　アメリカ空軍の偵察機撮影

冬島西方沖で
アメリカ空軍の攻撃を受ける天城山丸

「わが軍の損害は、飛行機270機（戦闘70、地上炎上200）沈没艦船41隻（艦艇10、輸送船31）燃料タンク3基、軍需倉庫、糧食2,000トン、死傷者　地上600人、海上2,000人、壊滅である。」（米軍資料）

これによりアメリカはサイパン戦に集中することができ、7月にサイパンを陥し、ここから日本各都市への連日の空爆を開始し、ヒロシマ、ナガサキへの原爆投下となった。

従軍慰安婦のことにふれなければならない。私の所属する施設部は、2ヵ所の慰安所を管理していた。希望のない戦地で青春を奪われた朝鮮の女性たちが、性的屈辱にさらされていた。1日10人余りもの相手をさせられ女性たちは身も心もぼろぼろだった。

昭和17年（1942年）2月に公布された「朝鮮人労働者活用に関する方策」によって朝鮮の若い男性は軍夫や炭鉱労働者として強制動員され、多くの人が生命をおとした。

女性は、この方策に関係なく「朝鮮人女子挺身隊員」の名目で、甘言をもって戦地に送り出された。済州島では銃剣を突きつけ否応なしに拉致したあと、車上で犯すなどの犯行まで報告されている。」（吉田清治著『朝鮮人強制連行―私の戦争犯罪』）。

このような状況にも拘（かかわ）らず「慰安婦訴訟」は、ことごとく退けられている。私は慰安婦の悲しげな眼を思いだす度に、歴史の真実は曲げてはならないと思う。

8月26日韓国政府は、日本軍「慰安婦」など、日本の公権力が関与した「反人道的行為」について、日本政府の法的責任を追及していく方針を発表した。日本政府の真摯な対応を求めたい。

1931年（昭和6年）旧満州への侵略に始まった15年戦争は、アジア各国に堪えがたい痛苦を与え、自らも「軍人、軍属、準軍属」230万人、外地での一般人30万人、内地で

の戦災死者50万人、計310万人を死なしめた。（厚生省）

今のイラクをみるとおり戦争は無辜（むこ）の民を惨禍に巻きこむ。「平和都市宣言」をもつ我孫子市に住み、平和憲法のもとに生きる私は、「殺し殺される」戦争に反対し、戦争ができる国家への企てに反対し、大勢の市民と共に憲法九条を守っていきたい。

最後に太平洋戦争に於ける日本海軍の喪失艦船数を示したい。（海軍省資料）

戦艦8隻、航空母艦19隻、巡洋艦37隻、駆逐艦134隻、敷設艦及母艦10隻、海防及護衛艦75隻、潜水艦128隻、実にこれだけの艦船が鉄のかたまりとなり、無念の水漬（みづ）く屍（しかばね）をかかえて海底に沈んでいるのである。

戦没者の冥福を心から祈って終わります。

百をめざして

的山　ケイ子（新木野在住）

もちろん「百歳をめざして」のことである。60年前、長崎で体内被爆児として生まれた私の生きたいという目標である。

幼い日の　的山　ケイ子氏

私の生年月日は、昭和20年9月24日。長崎に原爆が投下されたのは、昭和20年8月9日。私は9ヶ月の胎児として、22歳の母のお腹の中で被爆したのである。被爆した場所は長崎市立山町。爆心地からは2.4キロメートル。爆心地から東に小さな丘を越えた自宅でのことであった。

家は爆心地からこれだけ離れていたにもかかわらず、爆風でガラスが割れ、母はけがをしたそうだ。両親は何が起きたのかわからないまま、丘を越えて逃げて来る被爆した人々の悲惨な姿を見て、「たいへんなことがおきたらしい」と思ったそうである。

その後、父は親戚の者の安否を気づかって爆心地の方へ探しに行き、母は私の入っている臨月にもなる大きなお腹を抱えながらも、逃げてくる悲惨な姿の人々のお世話をしたそうである。自分が身重で大変でも、お世話をせずにはいられない状況だったそうだ。

長崎の夏は暑い。重い大きなお腹を抱えた母の大変さを考えると、今でも申し訳なかったと思う。忌まわしい戦争も終わった秋、9月。私は一貫目を超える大きな赤ちゃんとして、無事誕生した。

以来60年、私も還暦を迎える。すでに両眼ともに人工水晶体であり、1年半前には、乳がんにもなった。被爆との因果関係があるかないかは不明ではある。

しかし、母が近年になって「あれがなかったら、おまえは死んでいただろう。」と言うことがある。私は生後1週間くらいから、顔が腫上がり、頭は吹き出物でかさぶただらけになり、まるで、お岩さんのお化けのような赤ちゃんになったそうだ。

生後141日目に、生まれて初めて撮った写真がある。頭の帽子は、傷あとやまばらにしか残っていない髪の毛を隠すためにかぶせたそうだ。母は、吹き出物が被爆の毒を体の外に吐き出してくれたから、私は命を取り留めたと今にして思うようになったそうだ。

1年半前、乳がんになり、「死」というものを自分のこととして感じた時、いま生きている自分の「生」の大きな意味を考えるようになった。

被爆者の高齢化が進むいま、体内被爆児である私は、生き残っている広島、長崎の全被爆者の中で一番若い。私が死ねば、広島、長崎の被爆者の歴史は幕を閉じるのである。「生きなければ」私が生き続けていることが原子爆弾の被害を世に証明することであり、平和を世に訴えることになるのだ。

自分の「生」の意味に気づいてから「百まで生きよう」が、私の密やかな生きる目標となった。我孫子市民となって32年。今年、我孫子市の「戦後60周年記念平和事業」の一環として「平和祈念文集」の作成があることを知った。この文集に寄稿し、私の密やかな生きる目標を公にすることで、平和を願うと共に、百まで生きることに対し、自分自身に負荷を課したつもりである。

百まで生きて、いな百以上まで生き続けることで、原爆と戦争の悲惨さを、平和の尊さを世に訴えたいと思う。

東京大空襲二十年三月の体験

室山　俊彦（中峠在住）

当時私は東京墨田区向島国民学校3年生だった。東京大空襲に遭遇した時が脳裏に浮かんでくる。小学 1～2 年頃迄は平穏に過ごしていた。お祭、縁日、学芸会と楽しい日々を過ごしていた。その平和な自分達の生活に暗雲が立つ様になって来た。子供の自分には関係無いと思っていたが近所のお兄さん達が軍隊に召集されて行く姿を見る機会が多くなって来た。町内では出征兵として見送るのである。自宅前に立ち、両親、兄弟、近所の人々が見送る光景を見て思った。町内全員でバンザイ、バンザイと見送る。両親は泣いていた。

当時は理解出来なかった。町内で3人が入隊して行った。町内は若者不在地帯になっていった。

やがて大通り（現六号線）を戦車数台騒音を轟かせて通り過ぎる様になった。まだその時は楽しく見物していたのだった。一番衝撃だったのは、私達に隣接する家屋15軒を破壊する事になったことである。理由は空地を造り火災延焼防止及び防空壕を造るためだった。破壊された家屋の人達は何処に行ったのか子供の私は知る由もない。その家屋を壊す時私は見ていた。二階建の一階部分の全柱の八割位「ノコギリ」で切り、柱に縄を結び全員で引倒すのである。私達の隣組はそこに出来た空地に防空壕を造ったのである。後にその防空壕と家を何度となく往復する事になるのである。

戦況は益々厳しく我家の暮らしの中にも実感として表れる様になって来た。先ず食糧不足。親父は一日中農家に買い出しに出掛け少しでも口に出来る物を購入して来る訳である。私は兄弟6人、大家族である。両親の苦労は大変なものだった。ある時空襲警報が発令され防空壕に避難した。アメリカ軍偵察機2機が上空に現れた。私は防空壕の入口から半身を出して上空を見た。誰かが言った、“偵察機だから大丈夫だ”と。私は見ていた。荒川土手には日本軍が居た。偵察機に向って高射砲を撃っていた。偵察機の周囲に砲弾が炸裂するがなかなか命中しなかったがその内の1発が命中。機は回転しながら落下して来る。と同時に2人の米兵が落下傘で降下して来る。後日捕虜になった旨発表された。

空襲は増々激しさを増し、1日何回防空壕と家を往復しただろう。とうとうあの日が来た。何時もの通り警報が鳴り何時もの通り防空壕に一目散に姉、弟、私3人は走った。防空壕に着いた時はもうB29爆撃機から落ちてくる焼夷弾が夜空から舞いながら落下していた。四方八方から炎が上がった。そして夜空を照らした。家屋と言う家屋は大火に囲まれた。我家も炎の中にあった。炎で防空壕も危険となった。

私達は防空壕から出た。1人で立っていられない。姉、弟、私と3人手を握り合っていないと強風に倒されるのである。両親、妹達はその時どうしていたか記憶になかった。炎で昼間の様な明るさの中を逃げた。私はその時発熱していた。どう逃げたのか記憶になかった。私が目覚めた時見知らぬ家の庭に寝かされていた。周囲に誰もいなかった。不安と恐怖心で動けなかった。数分後父親が来た。父親の背に獅噛み付いた。

やっと学校に着いた。講堂には母、姉、弟、妹が居た。講堂は人達で埋もれていた。カンパンが支給された。1人10個程度だった。親は自分の分も私達に食べさせた。翌日早朝より赤ん坊の泣く声、早く家に帰ろうと泣く子、私は我家がどうなっているか心配だった。焼失したのは分かっている。1人で行ったが何も残っていなかった。我家の焼跡に立った。只呆然と見るだけだった。何か残っているものはと入念に探した。最初に目に入ったのは

真赤にまだ炎を出しているレンタン数個だった。自分の子供自転車、滑台は鉄部分だけが無残な姿で倒れていた。父親の工場は機械だけが数台立っていた。

近所の友達はどうしたのだろうか。3年生の同級生全員無事だったのだろうか。防空壕から逃げたあの日から二度と会うことはなかった。父親が焼跡に残ったコンクリート製ゴミ箱に「室山全員無事」と書き残した。後日親戚が心配して焼跡に来て、無事を確認した事が後日分かった。私の伯母は江東区深川地区に住んで居た。東京大空襲が一番激しかった地域であった。後日伯母から聞いた。頭上に火の粉を受けながら逃げ廻った。髪は焦げた。小さな池が目に入った。皆んな次々と飛込んだ。伯母も飛込んだ。呼吸する時だけ顔を出して又水中に。これを繰返して炎が衰えるのを待った。しかし伯母の背には1才位の娘がいた。池から出た時、娘の心臓の鼓動は二度と動かなかった。

私達は学校から焼失しなかった板橋区の親戚の家に世話になった。そこで1週間程過ごしたが、板橋地区も危険となり親父の田舎である兵庫県三田市に逃げたのである。災害は忘れた頃に云々と言うが、戦争の恐しさ、戦争の惨めさ、戦争の残酷さ、戦争の無益さを、戦争を知らない子供達に伝えなければならない。

初めて神の声を聞いた少年の夏の日と、その前後の体験の備忘録

森本　武明（湖北台在住）

私は、昭和8年秋に4人弟妹の長男として、徳島県南端の1僻村で出生。部落は戸数50戸程。新聞無くラジオや電話も地主だけの情報通信欠落地域。鉄道も遠く、不便な片田舎。家業は、明治7年、太政官政府許可の官印付の看板のある、政府専売品、食料、雑貨一般を扱う商店。今も次弟が経営。日清日露の戦争に出征、朝鮮や旧満州で戦い、負傷して退役となった寡黙な祖父と父母が経営。周辺は温暖多湿で常緑に囲まれ産物が豊富。太平洋と清流も近い静かな地。代々の口伝は先祖は土佐長宗我部家の残党。部落の世話役。

酒嫌いの祖父と鯨飲猛酒の父との問答は、周囲爆笑の漫才でした。直情、熱血、淡白。しこりや遺恨を残さない人が多い、部族社会。

尋常小入学は家から2分の分教場。2年生の12月8日朝、教師が開戦を教示。戦争が理解不能で教師は質問攻めに辟易。薄暮に帰宅すると、父母も客も深刻な表情。それまでにも志願、召集で何人も出征兵士を見送り、遺骨で帰国の人達も出迎えましたが、万歳の祝福で出て行った人が？白木の箱を抱いた遺族の虚ろで重い歩みと、出迎えの人々の暗い顔に子供心は追いつけずでした。多忙な農作業の合間に幼児を育て、舅、姑に仕えている若い女性が、未亡人となって夜遅く来店し、片隅で祖母と母に、涙声で何かを訴えていた

のをよく見かけました。母は「気の毒で慰めようもない。この先、兵隊に出た家に後家さんが何人でるやら。東京の偉い人達は、遺族の苦労など全くわかっておらん。腹が立つばかりじゃ」とよく憤慨していました。昭和17年4月3年生。本校への長距離通学の毎日。

学校の名称も尋常小学校から国民学校と変わり、授業内容は軍人美談と銃後少年の精神教育に傾斜。難解な訓話。教育勅語を読み違えると不敬とかで、平手打ちとなり女生徒は早出の掃除。図工の時間は日の丸の製作が優先でした。反抗は男子が大声で珍唱歌を叫び、女教諭の音楽の授業を混乱させる。父は商品確保に四苦八苦でした。配給制度と丸公と云う価格の指定。甘味類は消えて、陳列棚も隙間が目立つ。しかし自然不変で、獲物は捕え放題。暖かいと海と川、野山で果実、罠や囮で雉、山鳥を獲る。農産物にも恵まれて不足なし。ただ、私の場合は、農作業補助、家畜の世話、弟妹の子守、祖母の飼う蚕の桑摘みや、商品の受領の為、往復3里の砂利道を父の曳く大八車の後押しなどが仕事。雨天の日旺（にっこう）を渇望。国の祭日や節の付く日は登校日でうんざり。読み書き、ソロバンは、6才頃から祖母が選任教師。お経仏話も教えられ活字を覚えるのが楽しみでした。絵本に夢中。

父母共、高小卒ながら好奇心旺盛。しかし我子に留意する時間がなく、口癖は、「自分の頭で考えて好きにやれ」と云うだけ。昭和20年に入ると皇国少年化の指導が強くなり、軍人精神注入棒と書かれた樫の棒での尻打ちの体罰。男子は登校拒否も出来ず、皆、戦々兢々。

学校は女性と中高年教師ばかりで、毎朝の集合整列、国旗掲揚、国歌斉唱、宮城、靖国神社遥拝、校長訓示はもう沢山の心境。殴られ叩かれ居残り罰等、敗戦までの、3年間で何を学んだのか、感もなしです。72才になっても国旗、国歌、皇居、靖国神社、憲兵、気を付け等の言語は、嫌悪感が先行。B29の機影、細長くて白い雲の帯。グラマン艦載機の飛来。松根油採取、タコツボ堀り。8月に入り、川で大量の鰻を捕獲し父を探したら、近くの地主の庭で大人達がラジオを囲み、黙然不動。父は鰻を無視し顎でラジオを指示。様子不明で立っていると、ピーピーの雑音と共に妙な音声が流れて完了。帰途、父が、「死んだ連中の責任を誰がとるのか、嘘つきばかりじゃ、敗けて当然」と云ったのに、驚きました。2学期は教科書の内容を墨で塗り潰す毎日。教師の言動豹変で生徒は唖然。21年卒業まで、旧中、旧女の受験者優先の授業でした。旧中合格で、離れた町での下宿生活。昼の弁当を上級生に狙われ強奪される毎日の試練。拒絶には問答無用の鉄拳の雨。忍耐の身に胃袋が悲鳴。9月から新制高の併設中、無試験で高校入学。高3の秋、父に一回勝負の東京行を頼むと、1回なら仕方なしとなり翌春挑戦。幸運にも志望校の志望学部へ合格。周辺町村と高校の先駆者となり、一家と親族にはまさかの福音。恩師からも、教導開花の祝

詞を貰いました。祝宴も大盛会。

時至り、入学上京の港で父から「とにかく多くの読書。仲間を作れ、学外でも学べ、好奇心持続、初心不忘、道理と信義に徹せよ。曖昧、姑息、卑劣、狡猾、欺瞞、自惚れは許さず」と厳命。卒業まで、春秋の神宮球場でのバンドの演奏。試合応援。仲間との酒。洋画鑑賞。図書館で終日乱読等。我が青春に悔いなしを実現。正邪善悪。理非曲直、当否の尺度は幼児から、意欲は環境の整備からと思います。恩恵銘記で思慮中庸。気質不変で自己管理です。

北朝鮮からの引揚げ

山口　明子（若松在住）

私の父母は、昭和 11 年赤ん坊である兄を連れて北朝鮮に渡り、父は朝鮮人小学校の教師として思い出多い日々を送っていた。終戦までに 4 箇所の小学校に転勤があった。その間に、姉・私・弟が生まれた。最後の学校は父が建てたもので、そこでは校長だった。

「日ソ不可侵条約」を締結していたソ連からの昭和 20 年 8 月 9 日の一方的な空爆が、私たち日本人の悲惨な避難生活の始まりだった。朝鮮半島 70 万、満州・中国 100 万の日本人のうち、南部にいた一部を除く多くの日本人が軍隊にも見放されて、劣悪な環境下で冬を過ごさねばならなかった。父は終戦の 3 日前に召集された。その頃は町には焼夷弾が落とされるようになり、防空壕に避難していた。16 日に持てるだけの物を背負って列車で避難し始めた。中にはソ連軍が侵入してきたため、何も持たず山に逃げ込みそのまま家に戻れず、38 度線近くまで 1 ケ月以上も歩き続けて来た人たちもいる。列車も足元を見られて、始終止まってばかり、お金を渡して動かしてもらったり、デマが飛んだりした。南下したものの、ソ連軍が 38 度線を封鎖してしまい、何十万という引揚者が零下 20 度にもなる酷寒の町々で、布団も着る物も不足のまま翌年の春まで足止めされた。私は小学校 1 年弟は 3 歳。

冬を過ごした興南の町は、日本窒素の野口遵が昭和の始め、寒村に作った化学工場を中心とする大工場群の町である。日本人は北朝鮮に道路・港湾・発電所・鉄道など建設し、多くの工業都市を作った。私たちは、そこの朝鮮人社宅の 4 畳半の一室に入れられた。最初に進入してきたソ連兵は、囚人の集団だった。時間を問わず、地獄のような暴行・掠奪・虐殺などの残虐行為を繰り返し、人々は寒さ（暖房はない）・発疹チフス・飢えのほかにその恐怖とも戦わねばならなかった。秋頃から毎日社宅の前を多くの死体が運ばれるように

なった。日本人墓地として山に千メートルのお墓を掘ったが、土地が凍り始めてしまい、最後は悲惨な状況を呈したという。

翌年春の彼岸に合同の慰霊祭が行われた。幾千人もの日本人が集まり、祖国の地を踏めなかった肉親の霊に、号泣したという。我が家でも母をはじめとして皆発疹チフスに罹り、急ごしらえの病院に入ったこともある。春になって次々と脱出が始り、海路・陸路とルートは様々に、朝鮮人・ソ連兵の掠奪に会いながら、人目を避けて早朝や夜に山の中を歩く。母によると皆青酸カリを持参していたという。38度線を越えたときのことは記憶にないが胸まである川を渡った人たちもいた。春の水はまだ冷たく、急流で抱いていた赤子を手放してしまった母親もいたという。老人は迷惑をかけないように自ら命を絶った人も多いと聞く。孤児となってしまい、朝鮮人にもらわれていった子どもも多い。私たち、母と子ども4人は昭和21年5月28日、天佑丸で505名の避難民と共に博多に着いたのである。

父はシベリアから脱走して、中国人の家で漬物の手伝いをしながら春まで世話になったという。少し遅れて、その年の8月帰国した。

参考

産経新聞（17、3、10）によると旧ソ連軍が日ソ不可侵条約を破って北鮮・満州に侵入し、終戦にもかかわらず

60万人をシベリアに抑留、内6万人が強制労働により死亡

朝鮮半島・満州から引き上げる途中の死亡者20万人以上

昭和史研究所の調査で見つかった「在朝鮮日本人個人財産額調」（昭和23年3月に　朝鮮引揚同胞世話会作成）によると終戦時、日本が朝鮮半島に残してきた個人財産の総額に当時の価格で257億円、現在の価格で4兆9000億円（預貯金について「終戦後の払い戻し高を北鮮なし、南鮮　6割と推定して計算」）

GHQの集計によると

日本政府・軍・法人・個人が朝鮮半島に残した財産は

当時の価格で891億円

現在の価格で16兆9290億円

昭和史研究所代表の中村あきら独協大学教授によると「戦勝国の威を借りて朝鮮で不当に奪われたこれら個人財産への償いはまだ済んでいない」

近年ヨーロッパでも、第二次世界大戦中の戦勝国の非人道的な行為を検証しようという試みが始まっているという。（産経17、3、10）

東京裁判は「勝者による裁き」であり、シベリア抑留・原爆・無差別爆撃などの勝者の戦争犯罪は問題にされることはなかった。

子どもが巻き込まれた戦争

和田　三千代（天王台在住）

開戦の日

昭和 16 年 12 月 6 日朝、ラジオは、真珠湾攻撃と日米開戦を告げた。両親が「大変なことになった。日本はこれからどうなるのだろう」と心配していたのをはっきりと覚えている。私も不安になった。

私は 6 歳、幼稚園の上の組だった。幼稚園に行くと、全員ホールに集められ、園長先生から「日本はアメリカと戦争をすることになりました。でも皆さんは心配することはありません。大人の人全部で、皆さんを守ってくださいますからね」とお話があった。友達は「エーッ知らなかった」私「知らなかったの？今朝ラジオで言ったわよ」と知ったかぶりをしたのまで覚えている。

学校の日々

昭和 17 年 4 月に入学したのは「国民学校」だった。朝礼の時には「皇居礼拝」とかけ声があり、校庭で皇居の方を向き、全員で頭をさげた。兵隊さんへの慰問袋を作るからと、作文の時間には「兵隊さんありがとう。兵隊さんのおかげで、私は学校で安心して勉強しています」と書き、家で母親に作ってもらった慰問袋に入れた。慰問袋に何を入れたのかまでは覚えていない。

学校の教室には「欲しがりません勝つまでは」「撃ちてし止まむ」「鬼畜米英」などという紙が貼られ、鉛筆や画用紙も自由に購買部で買えなくなっていった。それでもまだ、子ども達は戦争ごっこをしたり、大きくなったら看護婦さんになるんだと言いながらも、子どもの生活を楽しんでいた。その後、学校の農園があった久米川へ行くと、武蔵野の雑木林の近くで手旗信号の訓練があった。なかなか覚えられなかった。

初めての空襲

昭和 17 年 4 月、米軍の飛行機が初めて東京に来た。兄の学校で保護者会があって、母は留守、兄と二人しか家にはいなかった。空襲警報のサイレンが鳴って、兄が「三千代！防空壕に入れ！」と叫んだ。庭に掘った防空壕の中で、「このまま死んじゃうの？三千代まだ死にたくない！」と兄にすがった記憶がある。しばらくして母親が「大丈夫？」と勢い込んで帰ってきた。

疎開

昭和19年7月（国民学校3年）に、学校は国の命令で集団疎開を決めた。学校の農園があった久米川に行くことになったが、私は朝礼や式典でしばしば貧血を起こして倒れた経験があり、連れて行ってもらえなかった。

11月、母方の叔父のいる埼玉県熊谷市に、母の妹たちが子どもを連れて疎開していたところに私だけ割り込ませてもらった。子どもだけは私一人。家では末っ子の甘えん坊だった私が、従妹弟の面倒を見る立場になった。夜になると布団をかぶって泣いた。

12月の正月休みで家に帰った後、3学期が始まるので熊谷に帰らねばならない。母は寒い熊谷の生活のために、リュックサックの中にいろいろ詰めてくれた。その日「三千代一人生き残ったら、私はどうやって生きていけばいいの。死ぬならみんなと一緒に死ぬ」私は精一杯親に訴えた。

どう説得されたのか定かではないが、その晩は家で飼っていた鶏を絞めて、鳥鍋を作ってくれ、翌日父親と一緒に熊谷に向かった。途中鴻巣で列車が止まり、「空襲警報発令に付き降りて防空壕に避難せよ」と。やっと熊谷に着き、父は一晩泊まって帰って行った。私の言ったように、これが最後になるかも知れないと、父は一晩でも一緒にいたかったようだ。後日、母から「あんなに困ったことは無かった。三千代があんなことを言うとは思わなかった」と、父が言っていたと知る。

熊谷から見た東京大空襲

20年3月8日に叔父が亡くなって、母方の兄弟が熊谷に集まっていた。夜中、叔母の一人に起こされ、熊谷の駅前まで連れて行かれた。南の空が真っ赤だった。「大変な空襲だ。あんなに近くだから今夜は大宮がやられているのかも知れない」。大人たちのことばだった。東京大空襲であったことは、2日後に知った。

父の生家に疎開

さすがの父母も、東京を離れる決心をしたようで、3月の末に父が迎えにきて、学校の手続きを終え疎開することになった。行き先は父の生家、「広島県甲奴郡領家村」。仕事のある父だけが東京に残った。中国山地の谷間の村、敵機におびえることは無かった。姉や兄は女学校、中学校の寄宿舎生活。私は領家村立亀谷国民学校に編入。4月、4年生の私は「若桜隊隊員を命ず」という辞令をもらった。子どもも軍隊に組み込まれたのだった。校庭はさつまいも畑に変わった。

父の被爆死

20年8月5日、父は新入生募集の試験官として広島に到着、翌日爆心地から1キロくらいで世界初の原子爆弾を受けた。生家に帰ってきたのが8月12日、翌日から起きられず、母に学校宛の報告書を口述筆記させて8月18日午前1時この世を去った。47歳だった。（我孫子市消費者の会編「戦争の記憶」に詳述）。

私の戦争の記憶である。何と理由を付けようと、戦争はしてはならない。戦争は人間が起こすものである。起こさない方法を考えねばならない。